

扶桑皇統記圖會
前編
三

八遠13
2472
3



門へ達18
番 2472
3

扶桑皇統記圖會前編卷之三目錄

吉備公讀野馬臺詩 長谷観音利益の條

吉備公野馬臺の詩と讀みの圖

和笏初瀬観音由来 佛坐巖出現の事

安祿山謀害吉備公 仲磨靈救吉備公危急條

近江の湖水へ灵木流し来るの圖

隆昌女思ふ因て吉備公を救ふ圖

玉津島明神勸請

衣通姫人磨傳

長屋王諛死

大伴小夷復主仇事

大伴小夷乞巧と成て漆部君足と討圖

聖武帝光明子宮御幸

舍人親王薨去

始痘瘡流行事

僧元助乱宮内廣嗣謀叛

廣嗣憤靈殺之助條

元助筑紫ふ至て廣嗣が靈小遭命を隕と圖

目錄終

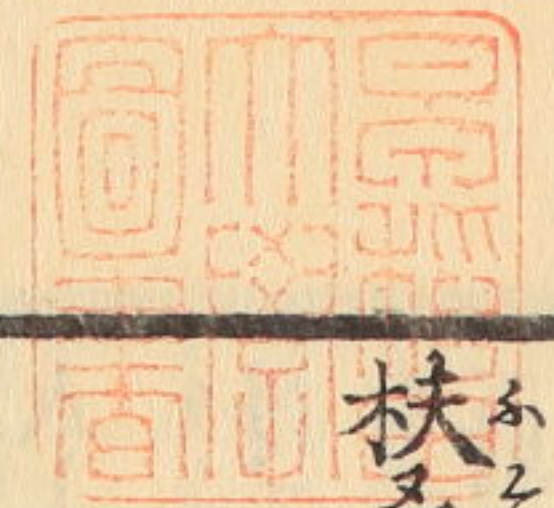
扶桑皇統記圖會前編卷之三

浪華 好華堂野亭參考

吉備公讀野馬臺詩

長谷觀音利益之條

吉備大臣八仲九の亡靈の助依て、倭國の傳へたる其の勝負を競を
 我も唐土四百余州第一の高手と叫ま、玄東が勝れども、隆昌が石
 を吞隠せり、對其成て勝負分る、宮中へ退れ、鴻臚館へ歸りて終日の
 疲勞を休められ、其夜又仲九の靈が現れて、吉備公小向て曰、百官中
 小於て其の争ひ、唐土隨一の名人と稱せられ、玄東おれども、我劫通力を以
 貴卿の勝とせ進せり、所を東が妻貴卿の得石を盗と吞隠せり、地基
 とたりたり、何と彼女が光明の石を吞隠せり、義と自状させ、貴卿の勝小定め
 る、やと問われ、吉備公答て、賊小公の助力依て、難中の難なる其の争



三代目不至りて玉磨彼を見ても眞の美玉なりとて琢磨し天下に雙たれ各玉と成り
 八則ち天の期よりたつるを彼玉凡集も倭國に渡るる天の時無ん有るや古
 銘中の人星を練り天星を成と縋り人かの私を以て大速小得んと欲するも徒小留
 て功無乃と然も逆天の時お任せ安閑とて年々年月を送るも来るも天の時を
 又失ふ事一。只誠心を尽し極くして需る心境まを遂小望を成違ふと下と上はれ
 を亡霊のもち點首冥途かり何東も天の時熱を待た不_レ如去_レ安禄山揚
 國忠赤の倭人如何なる毒針を殺命量_レ心をして油断が去るふと結合うち早
 曉の鐘も御音もな_レ亡霊もも驚_レ体も再_レ見_レや_レと_レい_レは_レ次_レ消_レ失_レ夜_レ
 仄くと明ふたり斯て吉備公を鴻盧館に在て唐帝の消息を待てるも何_レ便_レ
 なく程かく其年も春明れも唐の開元二十一年の春なりぬ_レも猶唐帝より何_レ
 沙汰もなく只文官張九齡の_レ倭伴使とな_レ常小旅館_レ来り文學儒經の論_レ談

を_レか_レる_レもの吉備公素より好む道れを九齡小就て諸の典籍を字び太公望_レ孫
 子_レの兵書_レを_レ字_レひ_レ究_レめ_レら_レる_レ然るも春暮夏過秋も稍_レの天_レか_レも_レ頃
 吉備公旅館の障子_レを_レ開_レて_レ隈_レか_レれ_レ月_レを_レか_レめ_レ仲九が天の原の縁歌_レと思_レひ_レ出_レ其
 宿志を遂むと異國の玉_レの_レ良_レ不_レ覺_レ符_レ衣_レの_レ袖_レを_レ沾_レれ_レる_レ折_レや_レ秋_レ風
 颯と吹来り月朦朧と曇りて何となく凄然時_レも_レあ_レれ_レ仲九の亡霊_レも_レ現_レれ_レ出_レ如何_レ
 吉備公長_レ旅館_レの_レ滞_レ留_レを_レ待_レむ_レる_レ人_レ昨_レ鳥_レ唐_レ帝_レの_レ官_レ中_レを_レ評_レ議_レ者_レ其
 始末_レを_レ告_レ進_レせん_レの_レ見_レ奉_レ入_レり_レ偕_レも_レ唐_レ帝_レ日本_レ王_レの_レ親_レ望_レ默_レ止_レる_レ彼_レ秘_レ言
 を_レ倭_レ國_レの_レ使_レ者_レ小_レ貸_レ子_レを_レ仰_レせ_レ安_レ禄_レ山_レ揚_レ國_レ忠_レ赤_レ先_レ小_レ田_レ基_レを_レお_レせ_レて_レ公_レ耻_レ辱_レ
 哉_レ子_レんと_レ巧_レ計_レ相_レ違_レせ_レと_レ腹_レ黒_レ小_レ思_レひ_レ唐_レ帝_レと_レ種_レ小_レ感_レ今_レ一_レ度_レ難_レ向_レを_レも_レて
 當_レ或_レせ_レん_レ明_レ日_レ公_レ致_レ宮_レ中_レ招_レき_レは_レ倭_レ國_レ傳_レる_レ書_レ籍_レを_レ續_レし_レ耻_レを_レ子_レんと_レ巧_レ
 哉_レれ_レも_レ貴_レ御_レ乃_レ博_レ才_レを_レ以_レて_レ書_レ画_レを_レ續_レか_レん_レ更_レハ_レ最_レ易_レか_レれ_レも_レ二_レ箇_レの_レ難_レ更_レあり_レ其_レ故_レ

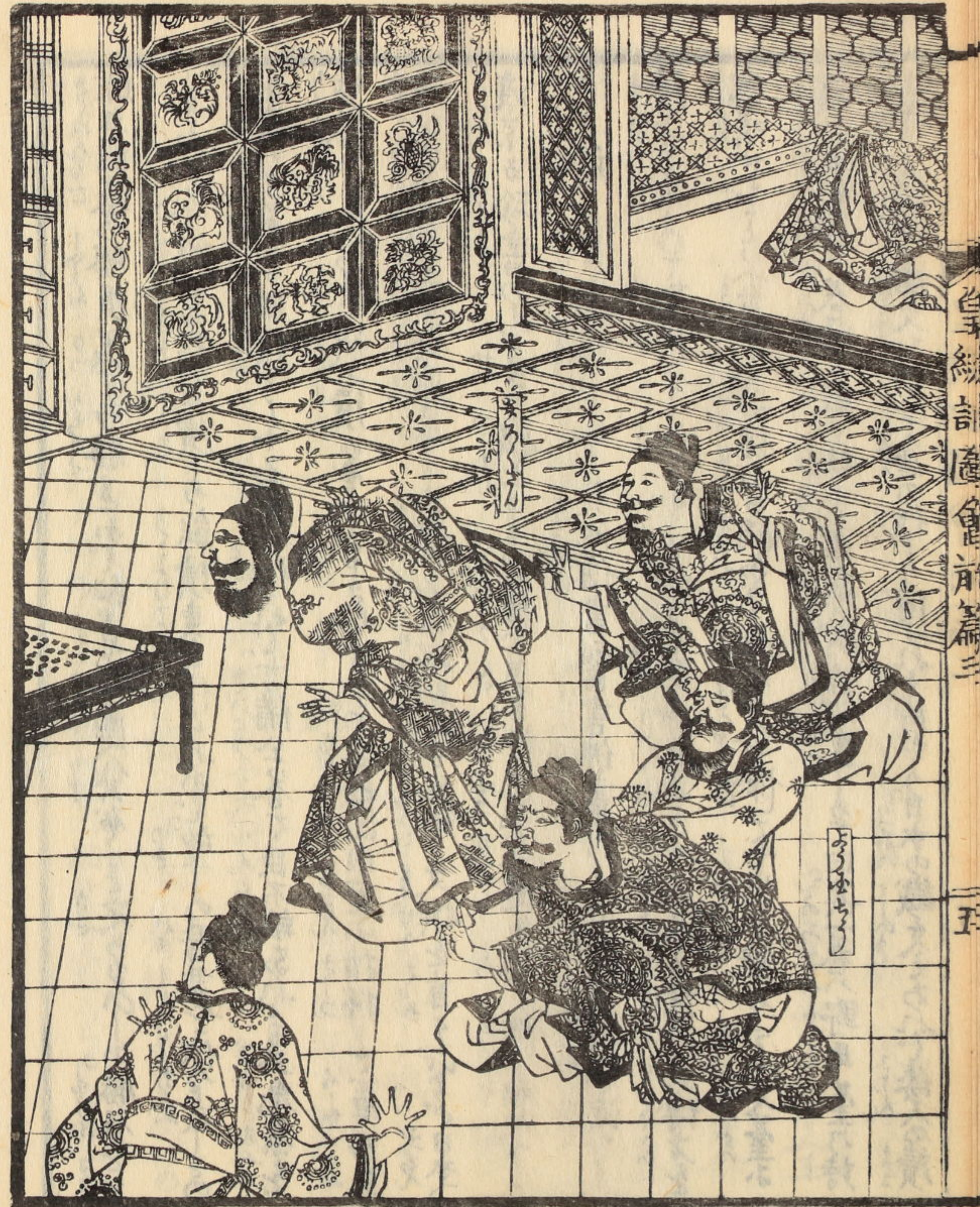
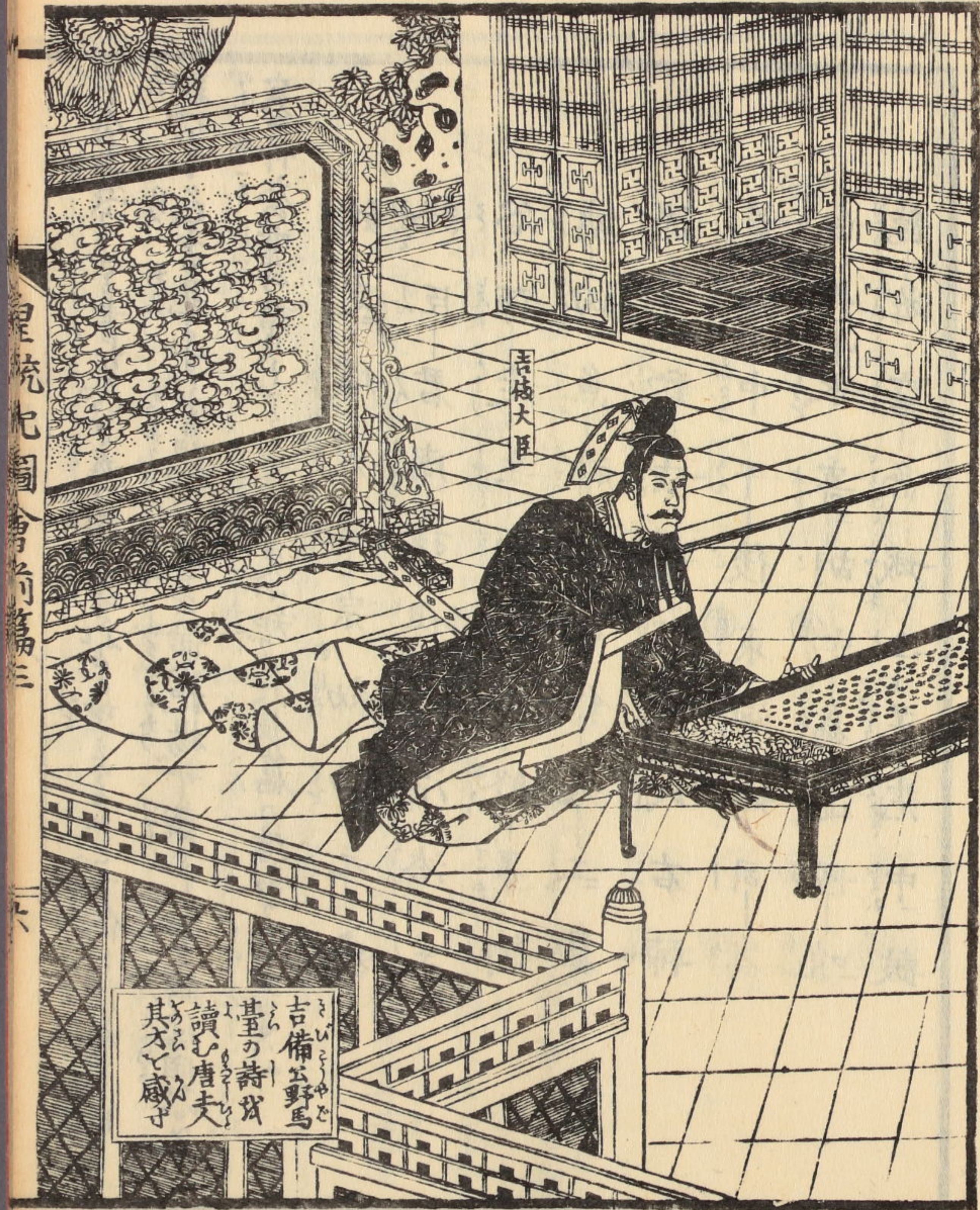
唐帝の宝藏小野馬基の詩といふ書あり。つゞ五言十二韻めて二百二十字あれども其点の及り縦横小乱して。何れの文字より續始め何れの文字より續終るも。此詩昔後漢の代に宝誌和尚と号する道徳高僧俗塵を避て或深山へ入菴と結び行ひて在る。何國よりともあつて入の童女来りて菴の壁小一字と書て去其翌日又別の童女入来り。はく壁小一字と書添て去如此する更連日不止百二十日百二十人の童女来り。来り百二十字と題し。宝誌和尚小告て曰此詩八是日本の織文なり。你字取て後世傳よ。後辛自註と續者有命と言終り。行方去と去とと。宝誌和尚奇異の思成なり。教の如く書写して世傳へ。倭の國の織文といふを以野馬基の詩と号す。但し野馬基野馬基といふ義あり。右の詩世傳れども如何なる博学の儒者文人も曾々續入なく。代々小傳りて今唐帝の什物となり。宝庫小秘置まぬ。貴卿緒乃書

藉を滞りたり續得れども彼野馬基の詩を出し。能續下ふか玉兎集を貸し。續得んを秘書と貸しと言ぬ。彼詩八入作ふ。化佛の作る織文あれ。常に四天王守護ま。我亦如。幽冥の陰鬼近者更能。と彼詩の。我却通力おも續得ん。貴卿丹誠を凝して神佛を祈り。其護護の力を借り續り。吉終り。次女六霧煙の。消失。吉備公大孫孫。我令日本渡らる書藉なりとも。普通通の書さるるも續得ん更難う。されども古より博識の儒者少く續る者なく。却通自在の仲九の靈も續更能ハざる難持。凡眼の我争う續得んや。若續ると言を曆書成。貸す。是を我一生懸命の一大支なり。噫。是はとも如何と云ふ。由俊才大量の吉備公の。愚果て忙多。心神我困められ。又思返。如何を思慮。勞多。自カハ及難。此六神佛の庇護の力を借る。他小絶。是を言ふ。

浄衣を着て手洗ひ口嗽きて。達し日本の方に向ひて礼拜し。仰願くは。大日本八百
萬神。哀愍我垂。御の彼野馬。其の詩を讀得。す。吾大君の御。而させの。玉
免集と得。を。多。と。烟。祈。中臣の。救。ひ。を。上。る。吏。千。座。小。及。又。年。未。信。仰
ある。和。州。長。谷。の。觀。音。を。送。拜。南。無。普。陀。洛。山。大。慈。大。悲。觀。世。音。菩。薩
妙。智。力。我。如。の。臣。が。大。危。難。を。救。せ。り。と。丹。誠。を。凝。て。心。祈。ら。れ。る。

因。小。曰。大。和。國。長。谷。寺。の。觀。音。ハ。聖。武。天。皇。の。御。建。多。かり。縁。起。次。ふ。妻。と。記。と
斯。て。終。夜。普。門。品。を。讀。誦。只。官。觀。音。大。士。と。祈。念。あ。る。る。ち。夜。白。と。明。り。々
然。る。小。果。と。唐。帝。より。清。招。の。勅。使。を。ま。越。せ。る。る。ち。吉。備。公。衣。冠。を。整。へ。て
華。清。宮。結。昇。り。見。ら。る。小。玄。宗。帝。錦。帳。の。内。小。出。御。あり。帳。外。小。文。官。武。官
朝。衣。朝。服。を。整。へ。て。魏。堂。と。居。並。たり。吉。備。公。唐。帝。小。拜。謁。あり。て。叙。け。の
椅子。小。掛。ら。れ。る。六。女。祿。山。切。を。護。り。日本。王。吾。大。君。の。秘。書。と。需。め。ら。る。る。ち。御。下

昨年田基の勝負を以てち勝とあり秘書と倭國へ貸給りと定めり。小勝負と
これ。今。般。書。藉。を。讀。り。能。續。吏。を。得。ら。れ。る。望。の。曆。書。と。貸。と。下。り。の
上。帝。かり。足。下。能。續。る。や。否。や。と。問。は。れ。吉。備。公。答。て。臣。不。敏。な。れ。由。玉。免。集。を
貸。給。ら。る。る。の。の。試。小。讀。ひ。を。と。や。れ。る。る。と。安。祿。山。内。官。小。指。揮。と。車。の。文
車。と。吉。備。公。の。前。小。出。出。せ。る。車。の。上。小。昭。明。太。子。の。撰。文。撰。を。首。と。い。は。る。日本
渡。さ。る。珍。書。の。と。多。く。積。上。り。吉。備。公。氣。を。脩。り。先。文。選。を。把。て。秩。と。用。れ。つ。つ
く。と。讀。り。吏。水。の。流。る。如。く。其。他。儒。書。醫。書。佛。書。小。い。る。道。一。句。半。点。も。定。ま。く
讀。上。る。吏。よ。り。熟。讀。せ。り。如。く。あり。れ。た。玄。宗。帝。と。先。と。て。並。居。る。諸。臣。其。博。才。を
感。嘆。せ。む。と。い。者。たり。安。祿。山。も。憫。あ。る。再。官。入。小。俸。て。七。室。を。鑿。り。る。文。基。小
錦。の。表。装。せ。り。卷。物。と。載。て。捧。出。せ。吉。備。公。の。前。小。置。し。て。曰。其。一。卷。ハ。野。馬。其。乃。持
と。号。し。倭。國。の。織。文。なり。と。漢。の。代。より。傳。れる。持。たり。日本。の。織。文。と。あれ。は。倭。人。の。讀



かむむ有らざる書なり。いざ疾續でせられしと望むるむむ吉備公須賀と胸うち
強げも色も見えず。水晶軸の二巻を徐尔把揚せ戴きて紐を解緑閑なれむ
実中仲丸の壺の語りごとく首尾更不知る長篇の詩あり其文字

龍	白	昌	孫	填	谷	終	始
游	失	微	子	田	孫	臣	定
審	水	中	勳	魚	走	君	壤
急	寄	干	支	膾	生	周	天
城	胡	後	葛	翔	羽	技	本
土	空	東	百	世	祭	祖	宗
茫	為	海	國	代	成	興	初
茫	遂	姬	氏	天	終	治	功
中	國	司	右	工	事	洽	元
鼓	喧	為	輔	翼	衡	主	建

牛	腸	丹	水
一	一	一	一
食	鼠	盡	流
一	一	一	一
人	黑	後	天
一	一	一	一
黃	代	在	命
一	一	一	一
赤	雞	三	公
一	一	一	一
與	流	王	百
一	一	一	一
丘	畢	英	雄
一	一	一	一
昔	竭	稱	星
一	一	一	一
鐘	猿	犬	流
一	一	一	一
	外	野	飛
	一	一	一

と書より五言十二韻百二十字の文字八續ある何まの文字より續始むれども知
かゝ縦不續横不續後より續首續百般千般思慮を困め肺肝を確けども更不訓
下らされむ全身汗不漫り心中日本大小の神祇を初と殊更長谷寺の観音菩薩を
深く祈念し万望此詩を續得ざる當座の耻辱を救せんと心小渴仰有るより
奇あるを忽坐し空中より小細なる五彩の鱗下りて東の字の上少時留りしより
海の字姫の字漸く小這るる小其跡は金色の糸を引て文字の順次句續まで明小
分りたり。吉備公心中の喜悦譬る小物なり是と天神地祇の應護具と長谷の観音

大吉御利益ある事と信心肝銘。月夜放まき蛇の糸筋小就て續きたる小紫並
とて詩の意隈かく解し。然ども命人々蛇を足る更かく安禄山吉備公の猶豫
ある然て是詩を續得ざるありと独笑。如何や疾續せられむと急まき吉
備公亮示と亦笑。續上いん能まのく。高声小續上らる。其詩小曰

野馬臺之詩

東海姫氏國	百世代天工	右司為輔翼	衡主建元功
初興治法事	終成祭祖宗	本枝周天壤	君臣定始終
谷填田孫走	魚膾生羽翔	葛後干戈動	中微子孫昌
白龍游失水	窘急寄胡城	黃雞代人食	黑鼠食牛腸
丹水流盡後	天命在三公	百王流畢竭	猿犬稱英雄
星流飛野外	鐘鼓喧國中	青丘與赤土	茫茫遂為空

と字く句く一言の淀みか。弁舌溜くく懸河の如く續上られぬ。玄宗帝と先と
して衆人大小發た感。古より博學多才の史えある鴻儒也。續得ざる。難詩を
只度見て斯易くと續く。凡人小あつ。昨年の棋の手並といひ日本小如何ある大
智の人有人の量。皆舌と捲てを恐る。安禄山ハ又此度の心巧由画餅と成
一我無念小あひ吉備公小對ひ野馬臺の詩を續得られ奇特なり。但此
詩ハ先小あひ如く倭國の織文なりと言傳まじ。詩の意と解得る者有更と
まじ。足下小倭人小れを今續て詩の意を解得られ。其織文とハ何を
以てりやと結問吉備公答て。されたる倭國の織文とあれ。將來の更と今より
ハ知難しといふ。初句より四五句まで過去の義を思あする更のハ大略説せし
る。先初句小東海姫氏國とある。倭國ハ此唐土より東の海中小有る。東海と言
あり。倭日本國初天子と天照皇太神と号し。ちりて女帝小在。在と成て。姫氏乃

國とのひりあらん。弟三句の百世代天武と六百世八長久の大敷を以て。百世に限るよ
 義おあさきと。代天武と日本八天神七代地神五代合して十二代の間を神代と称し。十三
 代神武天皇の御宇より始て人皇の御代と称をされ。人皇神代の帝祚を受嗣お
 ひて國を治り。以て天武御代より多へ。弟三句目の右司為輔翼とを神
 武天皇の臣下天種子命。天當命。左右輔翼の臣と為て無道の者と伐有道
 の者と奉て政を補。右司とひて左司と兼。おん弟四句の衡主建元功とを
 人皇三十三代用明天皇の皇子聖德太子。衡岳の惠思大師の後身かると習を
 以て衡主とひり。元功成建ると右の聖德太子三十四代の帝推古天皇と浦佐
 一横政となりて冠位十二階を定め十七條の憲法を以て治國平天下の基と用。之
 故。元功を建るとする。第五句の兩句。初興治法事終成。祭祖宗
 とする。皆太子の功績中。是等の句まで。當今聖武天皇の御治世まで。乃

記中。中。弟七句より以下の將來の織文。なれ。前知する。斐能ふ。といと
 詩句の意を明く。鏡。安祿山。言句。小結。赤面。一言。も。幾。する。斐
 能。玄宗。帝。始。より。吉備。公。の。論。弁。を。居。ゆ。ひ。る。其。聰明。睿。智。を。深。く。感
 ず。ひ。る。兵。老。の。者。を。臣。下。と。な。り。て。政。道。を。佐。け。め。お。大。小。國。の。益。と。成。り。と。思
 へ。む。を。知。ら。げ。て。宜。ひ。々。々。の。戒。公。の。俊。才。名。弁。尋。常。の。者。の。及。ぶ。所。不。あ。ら。ず。此。六
 句。の。玉。免。集。と。も。一。句。也。先。代。の。秘。書。亦。只。一。部。有。り。と。あ。れ。む。秘。書。監。小
 命。と。て。字。さ。し。め。然。後。日。本。主。小。軒。せん。間。寛。く。這。田。い。ま。は。倭。國。へ。傳。へ。る。所。乃
 藝。能。な。ゆ。字。ひ。い。と。て。其。より。沈。香。亭。小。酒。宴。と。催。し。吉。備。公。と。重。く。饗。應。せ。り。ゆ
 々。る。お。吉。備。公。大。小。喜。悅。あ。り。酒。與。ふ。入。酒。宴。畢。り。後。厚。く。帝。恩。と。拜。謝。し
 辭。を。願。ひ。て。宮。中。と。退。出。す。鴻。臚。館。へ。く。倭。國。の。神。祇。を。遙。拜。あ。り。取。分。て。長。谷
 の。觀。音。の。御。刹。益。と。尊。と。深。く。佛。恩。と。謝。し。其。夜。ハ。快。く。枕。お。ど。著。れ。々。る

和州初瀬觀音由來 佛座巖出現事

吉備大臣の信仰ある和州長谷寺の觀世音とす。聖武天皇の勅願小依り
 神龜四年 吉備公入唐 小御建立あり。用基八德道上人奉行八藤原房前公
 佛子八唐王より奉朝せし賢父子。芥子園父子開眼八行基僧正して佛像八
 御丈二丈六尺十二面觀音なり。抑此觀世音の由來と尋むる小昔近江の湖水
 洪水せし夏有る多かり。何國より流せ出久長六間周リ三圍むる乃楠の大木
 湖水へ流せまきりて大津の浦へ流れより多かり。里人是を曳揚んとす。奇
 ある小楠小手を掛し者八悉く疫癘を患し。諸人大小恐れ其終小捨
 置るる乃楠八湖面を東西南北と流せ回リて年月を徑る小六和國八木の里
 小小井の廉子と呼る寡婦あり。二親及び夫小死別其追善の爲佛像一
 軀を造らんと志願と起し。良材を得ざる所小或人近江の湖小

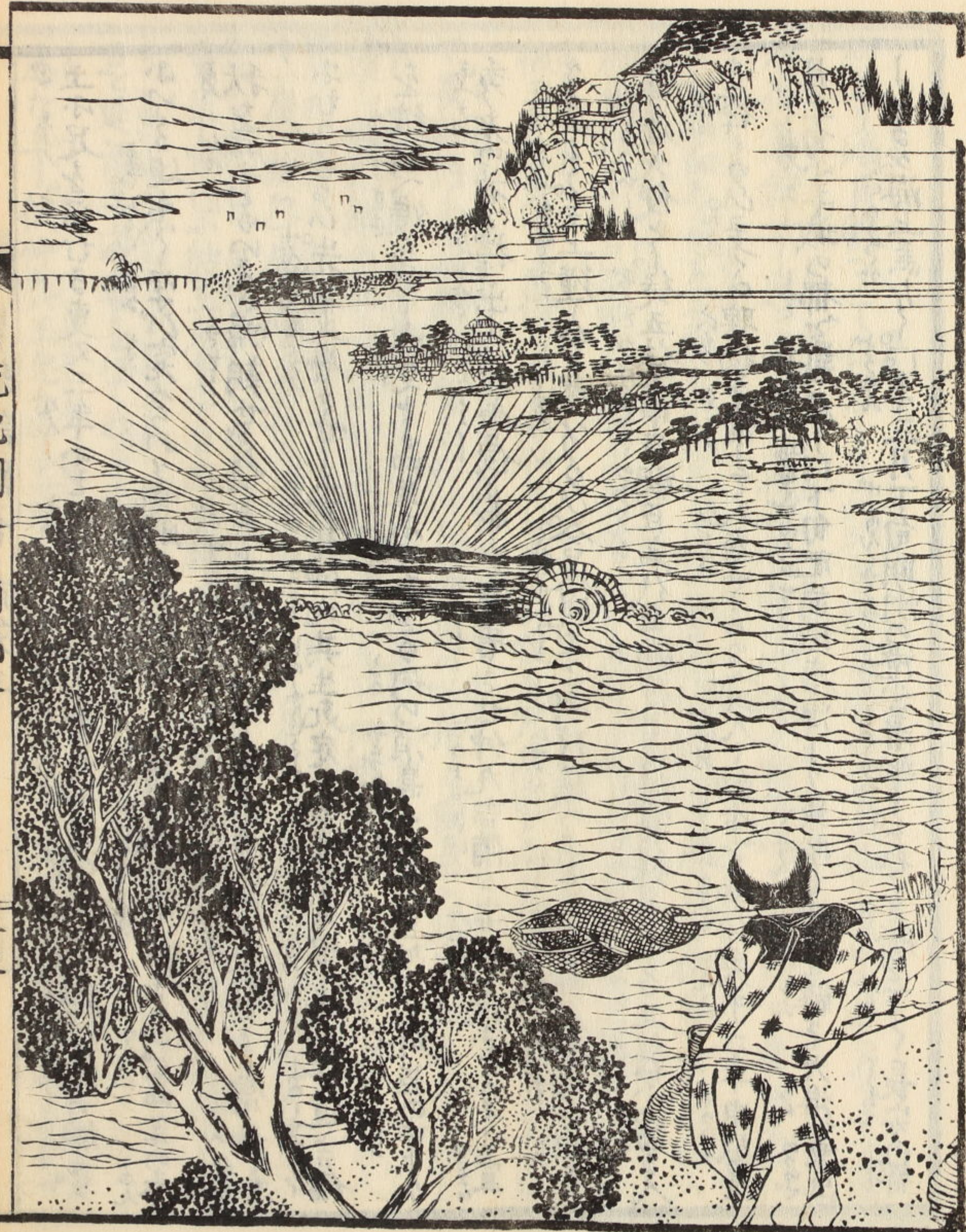
良材漂ひ流るる夏を終りしを。廉子悦び即ち江州大津へ到り。小楠此
 頃より大津の浦へ流寄し折れを。廉子是を以て里人小乞求る小素り屈
 せし。材木あれを乞小任せざるも。廉子喜し。人歩を雇ひ古郷の八木へ曳せ歸
 り佛師と需り佛像小彫んと思ふ。ち廉子病死し。其小其小廉子が家の
 あり小有る。是を取んて手以掛る者あれを皆疫病を患る。敢て取ん
 てる者なり。又數十年と徑り。然る小一年八木の里小洪水出て。件の楠同國長谷
 川へ流せ出ると。土人小珍し。良材あれを川より曳上。是を物小用ひんとて手と
 掛せを崇り。我受る夏以前の如し。依て是由恐れて注連を張近寄者もた。捨
 置る小數年まで。後德道上人長谷來り。右の楠を見て。垣結廻し注連を張
 る。或異し。土人小其故を問ふ。小。近江の湖水小流れり。八木の廉子佛像小造
 るとて曳歸り。小。廉子病死し。楠八洪水の爲小長谷川へ流れ出。曳上て物小用

ひとと手成掛る者あれむ皆崇り成受るる也。如此小垣を結注連を張みかると語り
 するも。徳道上人はて是靈木なり惜いふ。廉子と申望を遂げりて死没し
 更我此杖を以て佛像を造り其女の志願と果すむ。我小給てんやとこと
 くれむ土人一儀も及むと許しゆる。上人喜悅あり人歩を憑て長谷山曳
 上佛像小造んと欲せむ。今負僧を自力不及む。楠の側小草菴と結び且々
 杖を禮拜し。万望佛像と造りなる力と助る大檀那を得さる。祈念ある更
 三年小及び。茲る小藤原房前公の嫡子一日狩獵の為長谷山へ入る。二人
 の僧杖木の前小坐して。袖う小禮拜して居る。不審小思れ互寄て其故と問は
 ざる。小徳道上人楠杖の末由を語り。佛像小彫んと欲せむ。自力不及む。大
 檀那と得人。如此小尋年祈りかると答られ。房前公深く感心あり。実奇特
 なる志。當今六佛法を御信仰せよ。我既洛の上君へ奏聞し。佛像と彫

る。力を助く。仰せ。上人。大に歡喜あり。拜謝して頼まれ。房前公帰
 洛ありて。後。奈内にて右の由を奏聞し。及む。帝も兼て觀音の佛像と造る。本
 と思召る。折く。ある。睿感あり。其頃。名佛師と世稱する賢文子。芥子園又
 子小命。の。彼楠杖。にて。二丈六尺の土面觀音の像と彫す。め。賢文子。又子勅
 命と奉り。長谷山。到りて。二人丹絨を凝し。遂小楠杖を以て觀音の天像と彫し。畢る
 が。二丈六尺の大像。あれ。臺座。何を以て造る。及む。又子高儀。といふ。二決する所
 其夜。一山。大に鳴動し。る。諸人。甚だ。驚た。是。何ある。變更。お。や。と。恐怖し。る。所。明。る。ふ
 よ。く。震動。止。る。是。小。依。て。夜。明。て。山。登。り。る。一。夜。の中。八。尺。四。方。の。岩。出。現。し。上。面
 平。く。あり。て。坐。す。佛。足。を。載。る。所。有。る。小。徳。道。上。人。も。賢。文。子。父。子。も。奇。異。の。思。ひ
 たり。是。緒。天。の。加。護。の。由。所。か。と。歡。喜。踊。躍。し。岩。の。根。と。深。く。堀。穿。し。る。小。更。小。底。と
 あり。と。實。小。天。力。の。為。所。あり。て。人。巧。の。及。む。所。あり。と。感。嘆。し。と。止。む。則。ち。其。岩。の。上。小。佛

像と載よる。殆ど此佛像の爲に別造成る如し。絨不思議と云ふ猶余りあり。斯て觀音の靈像成就せし旨奉聞し、則ち藤原房前公と奉行し、堂宇を建
 立せしめ、造管畢して初瀬寺と寺号と下され行基僧正兩眼させし。帝群臣
 從て御參詣し、多々乃金銀米錢を御寄附あり。又數多の賤帛と僧俗
 施し賑やしの爲なり。是より貴となく賤となく皆初瀬寺(泰結)緒の願を祈り、
 利益の炳然と御音の物々應る如く願ふと叶ふ。更なり。是亦依て日夜泰結の人
 絶間なく山川數百里を隔し遠國より皆歩み來て運びたる。是れ吉備大臣由此觀音
 產無を常小信仰ありて公勢の違ある。每歩み來運ぶるが果して今度大利益と
 蒙り身の譽と國の譽れと異國に残されたる。信あれ得有と。是亦の更と續み下
 因小曰賢文子芥子國又子小唐土の產あり日本(渡り)て緒寺の佛像を彫り
 其作至妙なり。皆靈驗あり。今の京都誓願寺の本尊阿彌陀佛由賢文子

芥子國の作なり。曾て一佛と又子所を異し、半身づ彫り持寄て合せたる。小
 一分の合する所なり。一人と刻る如くあり。緒人其絶妙を感嘆し、
 此本尊も頗る靈驗有る。小惜み私化二年正月廿一日火災ふりて焼亡なり。
 安祿山謀害吉備公 仲九靈救吉備公危急條
 却て鏡云宗皇帝ハ吉備公の俊才を愛し。如何ゆり。再土小留めて臣下を爲んとの
 と。翌日鴻臚館(使者)とまき吉備公之與慶宮へ召し酒宴と給り。又種々の珍異品と
 よめられ宮中(小)抑留して。二日小宴を同れ五日小宴と催して。饗食應し。或ハ緒般の
 藝術小堪能なる者と石守られて。吉備公小習字をいめ。いづの偏小其心を懐け
 臣下と爲んと計られ。吉備公ハ眞寔珍宝も妙まなく。只玉兔集と得て一日も
 早く帰朝せま。度々玉兔集思借の義を願ふ。帝ハ曆書とよむ。京
 日本(歸る)と思召を左右小寄て時且延され。吉備公心も唐



徳道 光成 近江の湖 楠
初瀬の 観音と 是れ 上人 放つ 流れ未
彫り 後

土小足を遣むる吏又三年ふと及び其間小書典書法軍字劍法緒の遊藝
 小いる迄来りて學び究められり。時小本朝小下道吉備入唐より已酉春
 秋を曆止しゆいませ帰朝せられ太上天皇待ひさせの御内侍に當今
 小むりせぬひ先年入唐せり安部仲丸其生死定らざるを以て再小下道吉備
 を彼國へ渡らせり。是より四年ふ及むる何の消息もなせぬ。陛下群臣の中より
 秀才の者を探出し遣唐使と申て渡唐させ仲丸吉備が安否を知らせせりと宣
 へるよし。主上謹んで奉りての舎人親王と御評議の上多治比真人廣成と以て
 遣唐大使と。從五位下中臣朝臣名代を副使と。判官録事各其器小當り人
 を擇むるひ多くの聘物を齎して入唐せしめ此人勅命を奉り天平六年申戌の正
 月上旬小平城の都に幾足り下旬肥前國唐津より兼船。船を解き大海へ乗出
 りしるが海上無かり。三月下旬明州の港小着船し。これより船を下り長安の都

小い鴻芦館へて休息し。此時吉備公唐帝の召依て宮中居られり。遣
 唐使着館せり由と申て大い悦び唐帝小御暇を願ひ鴻芦館に到り廣成名代以
 下小對面ありて互小無事を賀し悦び合更限り。さて廣成吉備公向ひ貴卿入
 唐せりてより已酉四年と歷せり尚歸朝せり由。當今太上天皇も大い待りてり
 彼玉免集ハハと得られぬや仲丸の生死の程も覚束なく向られ吉備公各其就
 て長物結あり如斯くありと。始仲丸の靈鬼の物語り。園基の勝負野馬臺の詩を
 續一條初瀬の觀音の御利益の更や二五千枚結られり。廣成より二座の人
 一度ハ孩れ度ハ感。又仲丸が憤死と哀れと。吉備公又廣成小向ひやするハ
 玄宗帝已小彼玉免集と日本王贈る。許容有かり。更と左右小守て時
 且と延酒宴遊樂を以て我を今日まで抑留せしむるハ我心を懷て此國の臣と為ん
 為かり。彼仲丸玉免集と字取ん。候小唐朝仕られぬ。我豈此國小留る

久や。貴卿唐帝小謁せしむ。玉免集を以て我中帰朝を許さる。中不中
 のる。唐と頼まれしむ。廣成承緒。猶万吏を平令。兩日休息して第三
 日。小廣成名代判官録吏吉備公。月伴。聘物を從者小昇持せ。王宮へ
 参内。玄宗帝小拜謁して。日本天子の勅書を捧げ。禮物を獻じて。唐朝乃
 太平無敵と祝賀す。玄宗帝も倭國の安寧と賀し。答礼する。のり
 大使廣成。封を改めて奏す。吾日本天子万民の為倭國小層道を起さん
 と。下道吉備を貴國へ来り。玉免集恩借の義を願ふ。所已小甲子の
 年月。今以て吉備を帰し。給らる。今般。臣等。以て御治世慶
 賀し。且玉免集恩借の義を再び願ふ。所かり。万望御許容か。の吉備
 も帰朝の御暇を給らる。希ひ。と啓奏す。帝聞。先年よ
 り吉備日本王の純書と持して。朕が國へ来り。玉免集を需む。更切あれ。も用祖

皇帝より珍藏ある秘書。只部右の。これを他國へ傳へ。如何と。臣下の奸纖
 區。二決せ。其上國勢敏。多。年月押移。然れ。も日本王の再
 度の烟望。中黙止。これを彼書と一部。写。て國へ遺。然。と日本王。呈。と
 して。這。鴻臚館。を寛。這。海路の疲勞。と休。右。廣成拜
 謝。上命。小從。旅館。て相待。中。上宮中。辞。鴻臚館。を帰。と
 多。儲唐帝。より張九齡。王維。と接伴。使。て。鴻臚館。於。倭國の使者。と
 種。小卿。食。應。あ。廣成以下。旅館。小。這。三月。む。小。及。び。り。茲
 小唐朝の使臣。安祿山。吉備公。小。耻辱。と取。巧。兩度の奸計。画。解。と。あ。じ。と
 深く。遺。恨。ふ。狭。吉備公。を切。害。せ。と。百般。小。心。と。及。し。其。使。と。得。し。と
 る。所。小。此。般。遣。唐。使。来。り。吉備公。を。迎。歸。る。小。吏。定。より。今。手。延。ふ。ら。り
 ごと。揚國。忠。以下。の。奸。徒。を。招。け。集。り。高。議。し。我。日本。の。使者。吉備。公。入。と

成をんふ才機人小勝也且勇悍なり茲由吾國小久し逗角と兵学陣法學
 劍の術をて学び究め人の剛臆地理の難易於中知る深を倭國へ歸きた後終
 此國の害と也也。茲る小我王遠を慮なり。珍藏の曆書と子(近た内小歸國せ
 りんと志す。大のなる御僻更あむや。我國の爲小吉備を討て捨んと思へり列
 位良針あむ相述らるる。と言ふ。楊國忠進に出吉備を害せんといふ兵刃と
 用ひん。鴻芦館小酒宴を設け餞別の酒を勸ると稱し。酒中小鳩毒を入て
 吉備を先く倭人們小毒酒を飲もて廢ふ。其不如といふ。安祿山手を拍
 此謀大不妙なり。茲よ毒針を用ちる。其準備を成ふ。去程小玄宗
 帝小吉備公と臣下小せんと思召る。其箇よるま。た色と察し。今入望の書
 然と歸國させり。廣成吉備名代亦と宮中へ召し。金鳥玉兒集及び大
 行曆徑貨物武器ホと下され歸國の御暇を給り。三人とも大不悦ひ拜謝

と厚く恩を謝し宮中へ退出し鴻臚館へ歸り。歸朝の用意と急た。是
 より以前小麻州の玄東が妻隆昌女。日後園小出て婢女と登飼の米の葉を摘て
 居たり。小婢女忽ち毒を投捨身を戦慄し。突起隆昌女を面を吃と見声も
 平日小変りて雄々口を口を多し。我は是日本の字士安部仲九たり。倭臣安祿山の
 奸計小陥り高樓の上小餓死し。無念の魂魄陽土を去と。聖鬼と成て倭國の物
 使吉備大臣と守護。金鳥玉兒集と需り得り。其一念通と。玄宗帝遂
 小彼書と吉備小給ひ歸國の願と許り。茲る小安祿山又吉備公と毒酒を以て
 害せんと巧り。先年因碁の勝負の時夫玄東が肩を隠さん為小吉備公の取れ
 黒石一ツ次取紙小包と吞隠せ。更我美り吉備公も知れり。茲る小石の足と
 以て照病鏡小字穿鑿有。時竹小腹中の石鏡小字。玄安祿山見答て。己小孔明小
 及んとせと吉備公你夫妻が刑せられんと憐れ。妊娠の子種たりと言たり。危

難を救れり。彼時吉備公おろせむ。你ハ腹を断され去東の刑するべし。其鴻思を思ひ安禄山が邸舎へ到り酒宴の酌をこゝろんを望む毒害の謀計を吉備公告危難と救ひ活命の恩以報せよ。敢て忽かする更勿れと言終り急ち地上お侍して向絶なり。隆昌女大に殺た婢女。只一尾條を悉く身お覚へある密更らねむ。是亡霊婢女小純と吉備公の危難と告げんとおもふ。身のもも堅ておろく。先婢女お六面お水と瀝れて呼活るふ正氣おふりて叱咄する体たれを茶湯を飲して氣と鎮ませ。借婢女お向ひ汝今言する更を覚へるやと問お婢女を何更お覚へどと云ふ。称亡霊の死言ある更と覚り。今内お入て夫去東お巨細を語り。今うて恩を知らる。禽獸もおかきうと云ふ。猶疑ひて倭人の危難を救むんを亡霊の怒お觸て如何なる祟りを受んも量らじ。依て去安禄山の邸舎へ到り。如此と云て酌女の役を乞受て倭人の危難を救ひいぬ。御身ハ患病と

稱と内房お引籠り。外より入る人お逢ふ。更おれと言らんを去東お其日より患病と稱し引籠り。隆昌女侍女奴隷を持りて長安の安禄山が邸舎へ到り。御願ひの條ありて遠く参り。者おい万望相見を展覧せしむ。せむれを安禄山在宿と在る。何者おやと呼入て對面する。何と申し怒あつ女お少時沈思して漸お思ひ出。你ハ先幸宮中お棋の勝負を競し時給仕出。女おとと向ひ。隆昌女頭を低仰する。如く其時給仕し。せむ者おてい実ハ去東が妻女お棋の技も粗知てい。去東も棋の勝負お危れ更ハ心力と添て勝せん。女官とわりて其席お侍り。わり。後るお倭人お業の外お棋の高手お夫も己お危く見。いハ不幸おて地棋をち。いハ石持更知す。と思ひ。倭人お勝更。能ハ去東を夫ハ深く無念お思ひ。因帰してより心痛の病を發し。医療手お竭せ。其強け。此頂疾病とわり。己お九死生の

際臨之扁鵲華陀とりも救ひがごとく是倭人と棋を争ひより幾一難
 病ふいむ夫の仇ハ彼吉備なり。今もあれ東病死をりいづ女あが吉備刺
 殺一夫の靈を慰んと思ひいひ小君の御免を蒙り。吉備ハ近丸内倭國歸り
 いより承りり左ありて夫が病死の後仇を復しいり復も不叶いむ。此國小在内り
 忍々報せまり行く所鴻芦館にて餞別の脚酒宴を促しゆす。風小
 ては是天の与ふる所なりと九死の夫を捨てて脚館へ奉りいかり。仰願くは
 小脚酒宴の酌を執せり。透を移して吉備と刺眼まりい此願ひを脚
 絆しゆらむ現世てハ君の婢をもあり。来世君が馬とも成いなりと言は巧くは涙
 と流して滅しゆらむとや。女禄山ハ毒酒の謀針其準備細ひかぎり。智才あ
 る酔人を得ど誰をう用ひぬれと心を賦る折あれ。是天の助ありと大不悦ひて
 面を和らげ。借ハ東が妻ふて在る。我其時をれも知らぬ。死你夫の為小仇

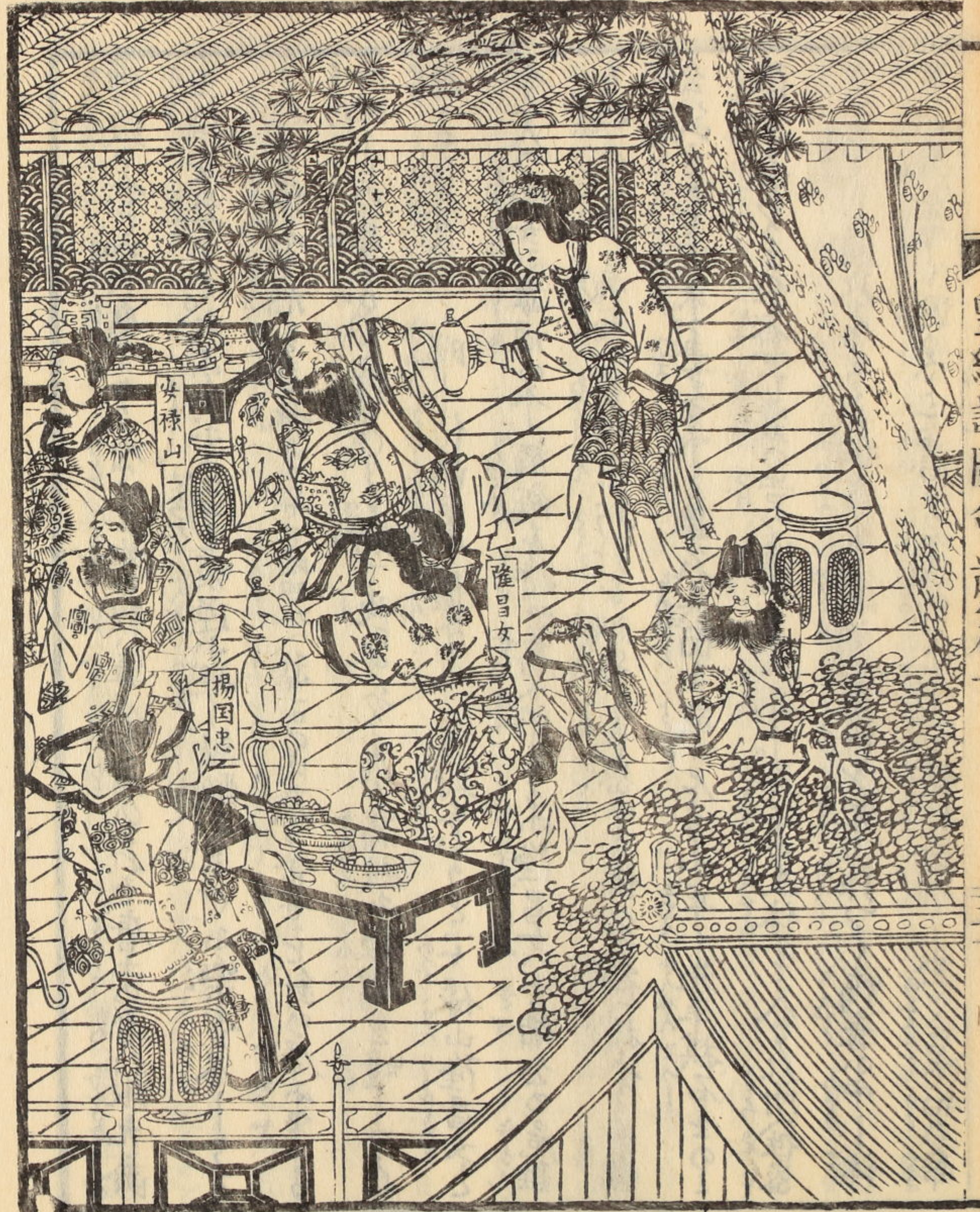
汝復さんと思ふ貞節小兒ど望むの如く酌を執る。但し七首を用ゆふ及むをど
 彼吉備ハ將來吾國の害と成る者ゆれば我君の為國の為小渠を毒酒を以て
 死滅せんと。己ハ其準備ハ細いれども倍酌の者克く智才を用ひて酌を執るん
 を謀針中らす。你ハ其酒宴酌ふ及び頃二の瓶子ハ毒酒と無毒酒を盛
 て出さず。是倭人ハ毒酒を吞せ。此國の者ハ無毒酒を吞らん。あたりむも
 酒瓶ハ異ある。更ふれども其蓋ハ一点の朱を引く物ハ毒酒なり。朱点ありハ無
 毒酒なり。敢て夜眼ハ見誤る。更ふれ但し倍酌の者。你一人のをめぐ。數人有と々
 ども。毒酒の酒瓶を你と今人我腹心の女と二人是と主とる。瓶ハ機密乃大
 役なれを救く仕損ざる。更勿也。又此國の者たも毒酒の義を決して言ふとさ
 むと謀。密なる。貴ぶとハ此謂なり。你ハ謀針を成遂ふ。莫大の恩賞を帝ハ
 中下して与ふ。心を用以て勉よと言せ。隆昌女満面ハ笑を合。大不悦ひて

起て拜謝し、絨巾に此多れを又何哉、患ひを承り、刃小血塗まどと夫の仇を復し、
 偏小將軍の賜なりと三拜九拜し、これを安禄山も満足の思ひを承り、是より
 隆昌女を己が邸全留め、尚万妻の手配を定め、己小用意十分、小調ひ、
 己小何擔の雀國輔、戎勅使とたり、鴻芦館へ遣はる。時小廣成吉備名
 代以下、八鴻芦館小在て、專ら歸朝の用意をとり、急死預め、妻綱ひ、
 夜吉備公の枕頭小仲九の靈現生出て告て曰、如何や吉備公望よ、玉兒集と
 得歸朝の友と由得て、と満足し、ゆらん我も妾執を暗し、いぞや、但し明日
 勅使と稱して雀國輔来り。唐帝より此館舎小於て、餞別の酒宴を賜ふ、
 是安禄山奸謀、酒宴小托と、卿小毒殺せん、巧たり、我より
 其謀計を知彼云、東が妻小禄山奸計を告、倍酢と成て、卿小危きを
 救ふと託せり。然れども、彼女實小卿小を救ふや否や、其心を知り、依て明

まて小荷物と明州の港の船へ運び積せ。何時小も出帆する、手筈と定め、
 儲明後夜酒宴の席小臨し、酒と吞休して、承り捨、兼て口小紅彩と、
 半酣小及んで、紅彩と吐て、血を吐し、体小死せ、煩悶して、席小伏せ、
 者小扶られて、乘輿小乘。急小後門より出て、夜と、小港の船へ、
 急小出帆せり、緑山追兵と、るも我身を感ず、遮るる、
 乃手筈と、能下知、又と告終り、次女小消くと、なり、
 廣成名代小と呼起して、密小亡靈の告と語られ、
 一夫妻、如何と、顔色小失ひ、
 知上小恐ろしく、不足万妻、
 物小運、
 未明、
 廣成吉備名代、
 接伴使、
 王維小

對面し出帆の用意調へ近日發足を命ぜられ昔我昔相伴て王宮へ参内し玄宗
 帝小拜謁して近日都戎發足の事由を奏し脚暇を願ひ旅館へ歸られ果
 して七雲の告のぞく崔國輔勅使と稱して鴻臚館へ入り多る遣唐使の面
 懸謹小見を請ふ對面ある崔國輔が白倭國の令近日發足ある由を帝に
 此誰舎小於て明日餞別の酒宴を催し別別の脚盃を給はんの勅詔ある其旨
 領掌あふと相述ぐる廣成以下中其姪謀あるがれも態と吞められ由て区
 谷へこれ崔國輔八仕は返し心小笑詩を告て歸りたり斯て其日由過契約乃日
 小も成多る倭人を鞍直馬戎後門乃外小鞍系たさせ専ら拔洛の準備と待と
 もあらず崔國輔揚國忠安祿山們鴻臚館へ入来り客殿小宴席と設け種々乃器
 皿珍菜鮮肉具をもり更た遣唐使の面が精拓し隆昌女及び其の倍取のさ
 花鹿小粧して酌せぬ又美貌の妓婦小羅綾錦綉とよそひ飾らせて舞繩

彈鼓させて饗食應りたり原より始の程小毒酒を用ひこれを唐王の者八張九齡
 王維を先けて大杯真小入盃を順逆小廻し献酬とせし小樂とて之を
 されども倭人小酒を吞体小えせて盤水へ捨し肉を食せし針の席小坐する
 心地一日の暮る候と待ちのぞく斯て夜もあらず満殿小銀燭を燈しつね
 恰も白昼のぞく暉し倍酒宴と盛なりたり時かやと安祿山隆昌女と
 今二人の酌女小毒酒の个酒瓶を持せ席へ出り多る小隆昌女小吉備公の危難
 を救んと兼て扇面小安祿山巧計を細密小書密小吉備公の袖へ投入り吉備
 公小此女と去東が事あふと思れ其面を能く見り小正先手棋石をのこ
 隠せり女あらず念亡靈の告の違はる感し淨手小立休て人かれ所往密
 う小扇子を開れり多る小細書して毒酒の謀計を記し詐つて鴆毒小中一
 小此席を早く避りしと書りたる依て扇子と懷中小隠し水口合で旧乃席



小飯着れたり。隆昌女吉備公の座とまゐり。閑手早く毒酒の瓶の蓋と無毒酒
 の蓋とを取り入れども衆人の皆泥の如く酔て眼も定まらざる。大詰迄歌罵ると
 喧しめり。此御酒ハ帝より別給じ仙家の美酒にて侍人の勸めよの宿命小
 ていぞ敬んで拜味りのと言さぬ。耽と同結一々るを吉備公其意と察し。是を
 毒酒とぞ下と思ひ廣成名代等小同結。先自身満くと引受吞体にて密中捨
 厄と廣成(献)と云々。素り此酒ハ毒酒にあらず。隆昌女が同結せし早く毒小
 中り体にて席を退れり。斯て廣成名代厄を受けて酒を吞体を
 かくと悉く捨るる。隆昌女が取換一瓶の酒を鴆毒ともあらず。相伴の唐人
 手早く瓶を執て己と酌又日伴の者中勸め毒酒を吞者五六人及ひける。吉
 備公六拜と一声叫ひ小舎へ紅吐て席上向伏苦じ体小めてきんんハ侍王

執り急お懐抱て席と退れり。是小續り廣成名代判官録更の録。皆
 合に紅秘を吐く毒小中り体を追く小介伏せしを兼て示し合せし。近習尾
 後周障強だて扶抱退る内小真の毒酒を吞し唐人們も鮮血を吐て此所彼
 処小介も喚れ苦むむ。之未安禄山毒酒の密計を深く秘して泣く者小知
 せきりしを席中の強動大方おす。尊りの強飲大食おて嘔吐し者亦も毒
 小中りと思ひ至強だて器皿を打溢ち踏確れ彼今入の毒酒の所持し女も俱
 小周障て瓶をとり落し瓶は砕けて毒酒の散乱せり。張九齡王維亦くより此
 度の巧計を知れども是女禄山我後を毒害せん。巧くおとすと思ひ毒小中り
 我幸小く鴻臚館を逃出私宅と地帰リ。此強動の内小吉備廣成以下乃
 入くハ後門へ逃ま出波系し馬小抄棄り。明州の港と望ん。鬼出を処小仲丸の靈
 現れ出我往方来り。と叫り。急し二團の陸火と感導れ。る。今く大い力と

得時は是臯月下旬の烏夜あれも鬼火の光を目的と。混鞭あて馬を逸れ
 ね従者の後れと息を限小港をきりて走り去る。却説鴻臚館の安禄山
 揚國忠崔國浦の管侍の門に毒酒の中へ入て致さふが正し倭人を盡く
 毒酒の中へ入れ心恨て席中の強動を鎮まむ武官の者と呼倭人の首領の者、
 毒酒にて自滅せしむるを従者門に毒酒を飲さむ有る生むる日本、
 帰らざる後日の患と成る渠ホク宿る客房へ押寄一人も余さず屠殺よと
 下知し武人ホク先小きて倭人の客房へ馳行て入る小豈そく人更小人影も
 なく後門の扉も開け門の柱も東へ妻隆昌女縛付られて有る也安禄
 山甚だ訝り何者不斯縛られやと向る隆昌女答て妾相公の命令と
 承て倭人毒酒を盛ひし彼吉備夫の仇敵を其首と得んも倭人の
 客舎潛来りし所吉備が従者ホク妾と不縛され倭人ホク轎に乗此門より

と白く安禄山下大の致た先隆昌女縛解得さ妻斐文鬼と名者ホク士
 率二百人を授け你明洲の港へ追行倭人門を盡く討取て歸ると余は妻
 文鬼領掌し緒平と房し明洲の港へ馳到り早倭船出帆し後たる力
 かり空手振て歸り安禄山が館へ入り斯と報られ安禄山大に望と失
 ひ斐文鬼が怠慢の罪を散く小比懲り為方され其後捨たる其後安禄山
 ハ唐の天監十四年叛逆を企自さくたれも不徳二年安慶緒の為小殺され
 玉津嶋明神勸請 衣通姫人麻呂傳

却説吉備大臣在唐の内本朝にて東咽蝦夷の嶋人們國司の命ホク皆死
 大椽佐伯宿称兒屋名汝汝殺し。國中横行し民の財物と奪掠し二國大
 の小強乱を由追く都へ往進し多由天皇逆鱗すく急だ夷賊と伐夷ぐ
 命しと藤原宇合と大将と。高橋安石と副将とて坂東九國の兵士を

三方余騎附屬しひこれに而將勅命を承り都戎進發して奥州へ下向し賊軍
 と合戦度く及ひ遂に官軍勝利を得て夷賊を伐散し虜の者と曳て
 都へ凱陣ありけるなり。天皇其軍功を御賞美され。官位昇進の除目行
 され坂東の諸軍ありて。小賞禄を給りて帰國せしめたり。東國の賊
 乱斯静謐おほひこれを上下安堵の思ひをあたるところ小茨或は星逆行し且又
 大自皇且現れ天変頻にお績くるも。如何なる変更やあらんと諸人安ん
 心ゆかり陰陽の博士ハ勘文を上りて深丸御慎なりと奏しこれを天皇歡慮
 穩りあせむと四海安全の御祈りありと。諸國を回令すと建させ。又三千人乃
 所司を出家得道せしめ。猶大和國の諸寺を命せて。七日金光明経を傳續
 させしめ。是等の功德依て。やがて凶變おわり。其年の冬。天皇
 夢想の告を感じて。紀伊國海部郡小衣通姫の靈を祭り。玉津嶋大

明神と神号して崇め。則ち和歌三神の二社なり。抑衣通姫とハ八人皇二十代
 允恭天皇の御后。心坂大中媛の御妹。二岐皇子の御女なり。此姫君天の生
 る麗し。其質を拙くとも。毫中おほまぬ。許おて。桃李の顔を。百の媚を。含ま
 嬋娟たる姿。風小惚り。柳の如く。素雪の肌濃く。丹花の唇愛敬づれ
 一度咲を。城を傾け。二度咲を。國を傾けると。賦く。此君ハ優ら。と
 かり許の美人あり。肌の艶衣を。徹通り。外おん。色を。許かり。と。維り。と。あ
 衣通姫と。やせ。と。これを。此姫君を。二度。人ハ。魂を。失ひ。眼を。奪れ。と。と
 り。更なり。帝ハ。衣通姫の。世ハ。類あり。美人。か。り。成。聞。召。衣通姫ハ。母公。不。隨
 ひ。近江の。坂田。お。た。れ。其。官。勅使。をつ。つ。と。せ。ひ。と。る。小。姫ハ。御。姉。皇。后
 の。思。心。と。畏。し。悼。り。ひ。て。固。く。御。辞。退。あり。ける。帝。尚。懼。し。ひ。七。度。も。と
 御使を。立。り。と。姫。を。固。く。辞。し。と。召。し。應。じ。の。入。り。と。れ。帝。大。小。脚。心。を

悩りぬひ舎人中臣の烏賊津とる者ハ寃ヲ覚ある者あれハ烏賊津言
まは衣通姫の許に到り如何にわむも強て伴ひ之と宣ひたる也烏賊
津奉りぬ松宅ふく皇孫を妻お納て是を袂に隠し諸坂田ある衣通姫の
方へ到り帝より御使のより言入るお姫のまは六帝の紹り成數度辭
とてアラスハ寃中恐まれ妻お納り御姉皇后の思召んとつても憚りあれ
百度千度召せまも得てを奉り此肯帰て帝お奏しなるとよとて更
お入内去ぬハ氣色ハえがりたれハ烏賊津中より仰せま更おてぬハ此度
臣への紹りぬハ姫後令如何と申すも強て伴ひ之を登りぬ御使か
む此より歸りぬハ刑せま更治定おてぬハ道おを此庭おて相果
とて敢てまんとせむと七日の間庭お跪つて動も食物をよへられぬ
受む人ぬ隙をうらひて彼稱を暗かより出と食し人同ハ飢先とべき

体小をてふくる姫烏賊津の体を見て思ひぬより御姉皇后の妬とぬ
て成憚りて今日までハ勅命と數度背たぬ思むわすハ心まし具ハ烏
賊津ハ餓死せんハ罪深たぬととよしく心とけぬハ大内奉来と
のさしひくるふと烏賊津仕は後と悦び逐お姫の御供と内裡帰リたれ
帝厚く烏賊津が功を賞しぬ數く御被物を給りたり諸姫を召て御
覽お小御食しよりハ艶麗お花おさるハ月も肉も美入たれ御愛
限りなく少時も御側を放りぬと然る小皇后ハ此御有る我御覽と御妬
乃色を穂おわすハ帝中より皇后の御心を奪ぬハ宮中ハ
在せんも如何とて衣通姫の別殿を藤原お管ぬハ其所お住ぬハ日夜御幸絶
る隙おたりたり其折ハ小皇后ハ御懷妊おて己ハ月満皇子と生せぬハ帝
日く小藤原の宮へ通せぬとせぬハ大内妬と恨ぬハ産屋ハ火をくけて焼

死んぬのふと女房連大不致たまふ苗のまのせ帝へ斯と奏し各ハ帝由
 深く致をひさむ皇太后を省めさせのひてまきく藤原の宮の行幸ハなう
 たり斯て翌年二月ハ帝衣通姫の更を忘れきりひ密小藤原の宮行幸ふ
 しひなろ久く程と隔てひひくを姫ハ如何思ふと思召物彦小御身と思
 ひ姫の有さると窺ひひふ此又姫ハ久く通をぬぬ帝と意しく思召多ふ軒場
 の翠簾小守りたる蜘蛛の糸引て下りたりと見ひひて帝の思ひ御座とも知むとぞ
 我背子が来ぬた宵なりささぐの蜘蛛乃ふまひひひてまきくも
 と口さささのひなれと帝是を安んじて御感情斜めあふまはとさ入ひて
 さくらが錦のひもと解さげてあまの糸むとたが一夜の
 と御返一歌を遊むいふく御電愛深く是よりまさせく通をひひ
 前も増て御契り深くおせひひたり皇太后此頃帝の藤原度行幸中

のふを深く好む恨むの衣通姫中御恨むの文を遣りひひくも姫ハ心芭
 く思召或時帝ハ奏しひひるハ妻大宮ハ近侍ひて常ハ君ハ見まきく
 かのいをぬれども御皇后更におつて君を恨むより更とて心まきくまきく
 を願くハ妻を遠き所へ移し置せのとをひひれを帝其願ひお任せよ
 河内國茅渚ハ宮室を造りて姫と移し任しめひ其よりハ度日根野子御
 狩を催され其お托して衣通姫の絆へ通をひひくも此姫素ハ天上の玉
 女あいの仮人界ハ生れ托しひひや聖武天皇の御夢ハ我國家を守
 護し殊更倭敵の道を守ると告のひひの儲こそ此度社壇と造営し
 神と崇め祭りのひひなり斯て玉津嶋の宮社造営成就しれを翌年乃二月
 帝紀伊國和哥の浦へ行幸中ひ玉津嶋ハ御社奉あて幣帛を捧げ神
 をまじめひ御拜礼あり其夜ハ社壇小室のひひるハ其夜帝の御夢ハ衣

通姫天女の姿を現し勸請の義を乞ふに悦び謝し一首と詠し
と告ぐと見ゆし御夢さめを帝信心肝命が御心よく神慮と崇
むひ十余日御逗留ありて浦山を御遊覧すく風景言絶絶し

妙不思召を明光の浦と呼かりし睿慮を都還御すは是よ
春秋二度玉津嶋明神の奠祭を執行せしむ此年小柿本人丸石見
廻りて平去と行年八十五才命終の時辞世の哥と詠して曰

かも山の岩根しまける我をうもむとて妹が待はあらん
抑此人丸其出所由其父祖ゆも詳らるる世に言傳ふる所天武天皇三
年八月三日石見廻山野と村落の民家の枡木の木に忽然と二十軒の人
出現と其体奇相異骨すと天性よく和哥絃詠しを圓司是を奇なりと

と朝廷(奏聞)を乞ふも即ち禁廷(徴)きて其者と睿覽すし和哥
を詠せし風調丸を睿感ありて姓名を枡本人丸と号し石見権頭
小任(和哥)の御侍續たり其次の年播磨守小補任せしむ和哥の
言れ高く持統文武の両朝(事)古今(独)歩の名人と稱せし秀珠(中)と

右の哥殊(小)人(小)繪(炎)外(逸)作(萬)葉(古今)兩集(撰)入(れ)此(人)丸
後(世)神(奈)入(丸)大(明)神(と)神(号)し和(歌)三(神)の(一)社(と)崇(め)ら(れ)る

長屋王(説)死(大)伴(小)虫(報)仇(主)事
茲(小)彼(安)部(好)根(が)後(楯)頼(と)左(大)臣(長)屋(王)と(も)天(武)天(皇)の(御)孫(也)高
市(王)の(御)子(を)緒(家)の(用)公(と)重(り)何(か)る(も)更(も)密(に)小(隱)謀
の(企)ありと(淡)部(君)足(中)臣(宮)所(連)東(人)丸(と)朝(廷)に(松)を(帝)大(孫)孫(を)

の(と)明(石)の(朝)霧(の)一(丸)を(と)船(を)と(お)り
右(の)哥(殊)人(小)繪(炎)外(逸)作(萬)葉(古今)兩集(撰)入(れ)此(人)丸
後(世)神(奈)入(丸)大(明)神(と)神(号)し和(歌)三(神)の(一)社(と)崇(め)ら(れ)る

長屋王(説)死(大)伴(小)虫(報)仇(主)事
茲(小)彼(安)部(好)根(が)後(楯)頼(と)左(大)臣(長)屋(王)と(も)天(武)天(皇)の(御)孫(也)高
市(王)の(御)子(を)緒(家)の(用)公(と)重(り)何(か)る(も)更(も)密(に)小(隱)謀
の(企)ありと(淡)部(君)足(中)臣(宮)所(連)東(人)丸(と)朝(廷)に(松)を(帝)大(孫)孫(を)

の(と)明(石)の(朝)霧(の)一(丸)を(と)船(を)と(お)り
右(の)哥(殊)人(小)繪(炎)外(逸)作(萬)葉(古今)兩集(撰)入(れ)此(人)丸
後(世)神(奈)入(丸)大(明)神(と)神(号)し和(歌)三(神)の(一)社(と)崇(め)ら(れ)る

長屋王(説)死(大)伴(小)虫(報)仇(主)事
茲(小)彼(安)部(好)根(が)後(楯)頼(と)左(大)臣(長)屋(王)と(も)天(武)天(皇)の(御)孫(也)高
市(王)の(御)子(を)緒(家)の(用)公(と)重(り)何(か)る(も)更(も)密(に)小(隱)謀
の(企)ありと(淡)部(君)足(中)臣(宮)所(連)東(人)丸(と)朝(廷)に(松)を(帝)大(孫)孫(を)

の(と)明(石)の(朝)霧(の)一(丸)を(と)船(を)と(お)り
右(の)哥(殊)人(小)繪(炎)外(逸)作(萬)葉(古今)兩集(撰)入(れ)此(人)丸
後(世)神(奈)入(丸)大(明)神(と)神(号)し和(歌)三(神)の(一)社(と)崇(め)ら(れ)る

長屋王(説)死(大)伴(小)虫(報)仇(主)事
茲(小)彼(安)部(好)根(が)後(楯)頼(と)左(大)臣(長)屋(王)と(も)天(武)天(皇)の(御)孫(也)高
市(王)の(御)子(を)緒(家)の(用)公(と)重(り)何(か)る(も)更(も)密(に)小(隱)謀
の(企)ありと(淡)部(君)足(中)臣(宮)所(連)東(人)丸(と)朝(廷)に(松)を(帝)大(孫)孫(を)

の長屋王朕小何の恨有て隠謀を企つん急だ其実否を礼を命と藤
 原宇合命の命の宇合勅詔を奉り先家人二百人を以て長屋王の館の四方を
 圍まめ。自ら自身長屋王の館に馳向はるる小長屋王を俄小軍勢乃
 館を圍り困り死んで如何思れん與殿小肉菴り自ら劍小串れて自撃
 られたる。北の方吉備内親王息男膳部王も自ら自害有るる所へ宇
 合馳着妻の体をも。長屋王の館小居合せ。下野宿奈上君以下七人を擲
 捕て歸り朝廷斯く奏聞有るる七人も禁獄させられ後小遠嶋へ流罪
 行はる。抑此長屋王の前小高市王の御子小御初稚の御相者
 此皇子の相を看る。此君不慮の義命と命と亡ひの相中ませり。出家入
 道一の天竺を終る。ある時災害と免さるる。隻能の雀うす
 十を大不慮の人も御愛子の妻たれを出家させり。いとを種

加持祈禱をせられ其禍を抜せられ果と天武天皇飛鳥川一行
 幸の折高市王の公達長屋王過て淵没れ己小御命の危うきと大伴
 金道折く其所小在合母と助け進ませ必先を免れ。御高市王
 と大不慮喜悅あり是ひ小加持祈禱の功也危れた命と助るる。多下
 今小悪相の孽ひも消滅せ。あると御安心有るる。香う年まで今年不慮の
 珍事小刃小く死に。彼相者の御符合せると禰命。これ今度
 一件其根元を探り。長屋王帝を恨み。隠謀を企てられ小非
 道。三品舍人親王朝政の義あり。長屋王の議を三度ほど難拒れ
 る。長屋王心中小大不慮。舍人親王で伐亡さんと。時、荷擔乃者と
 招れ。彼安部好根をも味と母と万更負せ。其後堂の中
 小重なる。漆部君足中臣東人兩人かり。漆部中臣長屋王と恨

更あつて急ち變心。帝小對謀殺の催。有る小總奏せし此度の
 時義小及びたり。甚る長屋王の腹心の雜掌小大伴子忠と以者有る
 が長屋王自殺の砌より跡を暗して逐電。名を公より緒方を尋搜され
 とも更小所在されれば其終捨られ多小二月許まで彼小魚何國小隱居
 ころ久或夜深夜小中臣東人の館。忍び入東人を圍の中にて刺殺。其首を
 とりて立退。其後を食の体小身を給。面小涙を塗眼小鮮をまきと相
 格を變大内の御門のわたり成。祿御。多小魚なりと知者更小たり。時小
 漆部君足と斯る更を勢。多小内せんと西三人の從者と引連禁門
 乃ち入り来。多小溝の際小摩被。休る非人忽ち刎起。隠持。刀
 を拔持走り。つと君足を啗と斬られ。君足大。急小逃入。とれは
 重。走れ。走り得。尻居小。嘔と倒。多小を小。た。と。く。二。太。三。太。力

斬る小と。遂小敢。か。付。多。君。足。が。從。者。一。騎。馬。を。う。ひ。て。王。を。助。え
 とも得。せ。と。憫。果。て。在。る。が。眼。前。至。の。付。ま。り。成。ん。て。流。石。諸。人。の。る。所
 を。愧。々。校。連。て。切。て。り。多。れ。も。小。魚。ハ。嗚。呼。の。者。あ。れ。を。世。と。も。怖。ま。す。血。刀
 成。揮。々。切。進。右。小。環。半。左。小。の。勇。然。奮。て。闘。ひ。は。一。人。を。大。加。衣。浴。衣。小
 切。付。残。る。二。人。小。半。と。肩。せ。れ。を。叶。へ。と。思。ひ。々。人。も。小。言。が。ひ。な。ぞ
 逃。失。多。此。強。動。小。禁。門。守。侍。の。武。士。も。先。より。東。西。を。圍。て。見。居。れ。ど。も
 誰。の。人。進。て。小。魚。を。搦。捕。ん。と。も。者。な。く。互。小。相。纏。り。と。あ。れ。よ。く。と。以。斗
 かり。れ。も。已。小。君。足。の。家。人。入。り。付。ま。り。二。人。を。半。と。肩。て。逃。去。多。と。ん。て。大。勢。乃
 武士。一。人。進。は。り。小。魚。一。人。を。搦。め。捕。ん。と。失。た。れ。ば。小。魚。大。音。小。見。ハ。尋。常。乃
 狼。藉。者。あ。り。も。い。は。れ。と。先。小。脚。不。審。を。蒙。り。自。殺。の。ひ。し。長。屋。王。の。家。人。小
 大。伴。小。魚。と。呼。ま。り。者。かり。我。至。君。長。屋。王。ハ。當。今。小。對。し。も。つ。て。聊。も。野。心。と



海部君足

海部君足



大伴の小良主
 長屋王の爲
 身乞巧に變
 千辛万苦七敵
 漆部君足

大伴の小良

大伴の小良主

存せんば臣小。中臣東人と漆部君足の兩人との始六主君と和熟いあう俄
 小及忠と今上對しより逆意を企つるやうに奏しける更征將をさう向ら
 至主君御親子北の方より自害しより依て我主君の虚名と雪だ具六御無
 念を暗しよあせんと東人先づ刺殺し今上君足を討て亡君の御爵
 憤を暗しれた今命生ず何ふん主君方の殉死もものわくと呼り忍ち
 腹を十文字小搔切てど失ふる是を見聞する緒人大りの感ト天晴大剛乃
 者の挙動やと称せぬ者ふりり。此更天聰小達し禁獄させ下野宿
 奈名以下の輩と右司小除て嚴く糾問させ長屋王の企六帝を傾け
 もろん為ふいと。舍人親王小恨あて彼卿を討取んと結構ありとて
 白状しるよ。長屋王の隱謀の御疑ひとけ漆部中臣が逸奏小極りる
 然れども執政も舍人親王を謀らんとせし企小合躰せし条罪輕くもとて

儲と七人も流罪小行れりるかり

聖武帝光明子宮御幸

吉備大臣と廣成寺帰朝

天平七年三月小帝御后藤原光明子
 と小藤原淡海公第二の御女あて天生容顏端麗ある更彼西絶飛燕とら
 と小此君小向いむを面を掩て愧めれやの美人あて雪の肌艶やうや。光有ら
 しくわむとて光明子と号し帝の御寵愛他小異小く。斯て皇太后
 宮小於て和哥絲竹の御遊を催され供奉の公卿小宴と賜ひり。小まね礼小
 仁義礼智信の文字と一字づ書す。是を裏向小伏満座の緒卿小探りませ
 られ。其文字小従々緑の物を給りりる。堂上堂下さうあて兵ト樂と
 皆萬歳を唱へ弁出度還御かりひり。却鏡先小と。遣唐使多治比の
 廣成とら。名代吉備の人仲丸の垂陰昌女おの情小よりて毒害の危難と

免れ道成急ら明別の港は着て船乗還を解て出帆し多ふ天の助る処
 小や折しも順風快く吹て船の走る度程がく。是より日小追風吹海上滞
 リなく七月下旬九州多祢が嶋小着船し久む大使副使以下悦ぶと限
 リなくは幸十月小平城の都へ着到し唐成名代吉備判官録事小のり道
 ち揃ふ参内し多ふ帝天機嚴く遠路の波濤を凌然無事小帰朝せ
 し然御賞美かゆひる。吉備公即ち唐帝より賜はりける。蓋賞内
 典金鳥玉兒集十卷大衍曆經一卷唐札二百三十卷。子成十二卷。孔子及
 十哲の画像一袖日影を測る鐵尺一枚銅の律管一部。鈸の方響音の律
 管の音と字を具十二條樂書要録二十卷。絃纏漆の角弓一張馬上水を飲
 漆弓一張面を露し四節を漆し角弓一張甲と射る箭二十隻平射箭十隻亦
 を献上せられ久む。帝の太上皇も大に御感ましく其功を賞しゆひて官位

進め禄を加ゆひ廣成名代以下少皆賞禄を給りける。偕太上皇吉備大臣こ
 向はせるひ仲丸の吏と回ゆひれむ。吉備公涙を流され仲丸が玉兒集と字し取ん
 ぬ。後小唐帝お仕て名を朝衡と呼ぶ。十四年が回苦学し遂小彼書と字し取清
 川と曰船して一旦唐土を去るれ。悪風小遭て玉兒集海中海底小沈め安南國へ
 漂着し。又唐朝へ歸り。安禄山が奸計小陥りて憤死せし條より。靈鬼とけりて
 困棋を教し。更及び野馬臺の待を初瀬の觀音の利元血小よりて續得し一件
 仲丸の靈隆昌女小紙と毒酒の雞と救せし更まで落ゆなく奏聞しりる小を
 帝も太上皇も聞り母小驚歎しゆひ。仲丸が多年の艱難あか其非命の死を
 哀れむゆひ且忠魂靈鬼とかりて吉備を扶け。遂に玉兒集と得しゆ。忠義感
 じゆひて正三位小増宣ある。吉備公中々仲丸の遺孤満月丸が母の仇敵好根を討
 入唐の隨を望し。義を奏聞中まれれむ。帝との孝心を御感ありて即ち朝廷召

出づ。満月丸の安部の家督と嗣ぐ。宣旨を賜り。又先地の上加祿をわく
のひら。満月丸の吉備公の父の遺物の斤袖を得て。此年月待撞れ。父の丸を悼
念するが。今禁廷へ召せ。安部の家相續の宣旨あり。小御加増と頂戴と。大
悦び厚く天恩を拜謝し。御暇を給り。吉備公と。小御退出し。吉
備公満月丸と。自らの館へ伴ひ。元服加冠。名を暗満と改名。安
部の名跡を。續され。後代天文曆道の博士。安部晴明。此暗満の裔孫
也。

舎人親王薨去

始痘瘡流行條

同年十二月乙丑日。執政一品。舎人親王薨去。のひら。通齡六十。をまへ。
此人。天武天皇第三の皇子。天性聰明。俊才。博く古今の書籍。通
曾て先帝の御宇。勅命を奉り。日本書紀三十卷。撰て。獻する。り。練
此書。かり。せむ。後代。上古の政風。公吏有職。等と。知吏能。より。た。小。実。小。吾。朝

乃良史と。斯程の智能の賢者。朝政私かく。淡海公。相繼ぐ。大
政官の吏を執行。ける。國家柱礎の臣。あ。上下惜ま。と。り。人。か。殊更
帝甚。御悼惜。ま。鈴鹿王を。以て。葬式の吏を。執整。り。め。其儀
式。ひ。太政大臣の。葬祭。小。准。せ。れ。即ち。帝。より。中納言。治比。真人を
勅使。と。て。宣旨。帯。を。太政大臣。小。贈。官。ある。旨。噴。を。せ。り。此。親王。乃。御
子。後。小。帝。位。小。即。ひ。淡路の。廢。帝。と。や。ま。八。是。ち。此。廢。帝。天。平。室。宇
三年。六月。小。御。父。舎人。親王。と。尊。ひ。崇。めて。崇。道。盡。敬。皇。帝。と。謚。を。奉。り
ま。山城。岡。深。草。郷。藤。社。小。社。を。建。て。其。靈。を。神。小。鎮。祭。り。の。ひ。ら。也。
有。り。以。来。末。世。の。今。ひ。ら。ま。宮。殿。魏。く。と。て。神。德。灼。然。た。れ。也。泰。緒。乃
貴。賤。引。も。き。む。拍。牛。の。音。絶。向。た。れ。と。尊。と。り。是。八。且。く。也。今。年。筑
紫。方。より。裳。瘡。と。号。る。大。惡。病。傳。染。来。り。夏。を。往。秋。を。超。久。雨。至。て。由

成止公公卿大夫より下市人農夫の別なく此患瘡
 を病て大死する者擧て針灸違た。吾皇國往古よりいまだ如是難病
 我患人なく今年始めて流行せし事也。典名醫といふも其療方を知
 ぶ諸國にも是かある大困る。帝も甚きを睿慮を愜し以緒國
 の神社に奉幣使を以て緒寺の高僧に大法秘法を修せしむる事也
 更其其險なり。此年より連年痘瘡流行し死する人いと多かりける。其中中
 天平九年四月小參議民部卿正三位房前公淡海公勇 五十七 日七月小兵部卿從三
 位麻呂淡海公四男 四十三 日月小正位左大臣武智大呂淡海公嫡子 五十八 日八月小參議式
 部卿太宰帥宇合淡海公三男 四十四 右を藤家の四家と稱し此人皆痘瘡
 を患て薨去せしむ。列位當今の御叔又めて殊小皆棟梁の臣おれ
 帝も御愁傷淺く上下とも惜と歎ぬふりける。抑武智大呂の館ハ

南小有とて南家と号し房前公の家北小有と北家と号し宇合公式部卿
 茂兼らかり也式家といひ麻呂ハ左京大夫を兼らるる也以京家と号し
 後世藤原家の末葉と号しとも咸く此四家より出する所なり
 本朝通記の註小羅山先生曰。豆瘡の病緒を医家者流小考る小隨の巢
 元方。傷寒。班瘡。死豆瘡。傷寒の部小有て治方あり。宋の陳言といひ
 班瘡病ハ内經張仲景皆載と蓋魏の朝より此病あり瘡の頭白
 根赤たよを俗呼て號豆瘡とい其形相相似る也あり。是所謂班瘡
 かり細粟麻子の如きものと俗呼が麻疹といふ又形ち大なるもの有芋と云
 萍といふ皆狂重ひくくも名呼も異なり。孫真人唐の高祖の時
 乃人なり。天平八玄宗帝の用之年申當る。茲を號豆瘡ハ中華より吾國の
 九州傳染し中國より都へくる。素り内經小載するところ。仲景の論せ

ざるを以て往古無是更不知之と云或書小曰後漢の光武帝建武
 年中ねんちゅう中南陽の屬を伐し時軍卒其地の毒氣を受て此瘡を傳染患
 てより中脘ちゆうかん流布を縋り故に此瘡を虜瘡りよせうと曰ひ又天行の疫癘を
 曰天瘡てんせうとも号し幼より老小のるまで一度病て再び發する更あはれ
 百歳瘡ひゃくさいせうとも縋豆瘡しゆうとうせうあり六其形も豆小似ればか
 裳瘡ちゆうせうとハ草瘡の略なりと云後世追々中華より治方の書渡りて今を
 緒医しゆいとも治方を得其難易を察し易症是を救へり莫人間中の毒瘡
 僧玄昉しゆうげんぼう乱宮内廣嗣くわんじ練叙 廣嗣憤靈殺玄昉條
 參議式部卿宇合公の嫡男小太宰小貳藤原廣嗣とい人右々る天平
 十二年緣故あつて竹垞紫ふ於て亡び其根元を尋るふ當時太后とハ淡海
 公の御女みづめ小宮子媛みやこひめとやまなり當今聖の御女君みづめ小在せり茲小太后いまは御

となく御不豫みよふぞ御心地みち怪せいで敢て人小對面たいめんとる更を嫌ひきらひ天白王てんぱくおうと始
 まりま御女みづめといとも御目前みづめ近著ちかるると典てんの輩は医案いあんと凝こり百術ひゃくじゆつと
 せも露つゆをるの強きやうもるをる帝大てい小患こゝろひひ此上こゝろ佛ぶつ法の徳とくをりて
 御平愈みへいをりたた思おも僧しゆう正せい玄げん昉ぼう其その頂ちやう碩せき徳とくのよええ高たかるる即すなはちち宮内みやない
 召よれてり加か持ぢせせるる皇み太后たいこう玄げん昉ぼうをり御み覽らんあつつつ快くわいぶぶ笑わらせせとと
 御不例みふれいもり稍しやう心しんせせりり体てい小こええさせせるる帝てい中ちゆう太后たいこうの御み簾れん内ない入い御み區
 りりて御對顔みたいげんあつつつ平へい素そ小こ變へんりり体ていもり在ありり是こゝろ小こ依よてて帝てい玄げん昉ぼうの法はふ徳とく
 をり甚しんぶぶ感かん感かんすするる多おほくくの賞物しょうぶつをり給たまはりるる玄げん昉ぼう是こゝろよりより日ひ夜や太后たいこうの宮内みやない
 相結あひむす御側みそば小こ又また追おひひ追おひひ御意みいおつつつ遂すい小こ恐おそるる太后たいこうとと枕まくらをり並ならぶぶとと女
 官くわん們ら與よてて私し語ご令れいといとも太后たいこうの御み更さらをり誰たれもも露あららひひ者ものハハ小これ
 とも隠かくははるるよりより顯あららひひととるる諺ことわざのよりり此こゝろ義ぎもも内うち外そと小こ洩あららははるるてて更さら

隠きふりたるを。藤原廣嗣是をばて大い狭た此頃頻小天変者續ハさる
 僻吏を天の咎の所あるを。とて表をとりて政事の得失を論じ天変地
 妖の凶兆を述僧玄昉宮中出入と。太后と奸婦も亦天下禍乱の基ハ
 されを早く去昉を誅し不法を糾し皇と練奏去えども。帝ハ御孝心深く
 在せむ。太后の思の程を悼りの。且佛乘未惑はれぬ。玄昉を信し。も
 更練を納め。玄昉の不行跡をも咎め。廣嗣の忠表を字す。置
 け。いも。薄情有り。玄昉斯と。帝大い怒り。太后ハ廣嗣の吏を散く。申
 さ。奏す。太后御憤り強く。帝ハ廣嗣を追退け。又。下。ヤさせ
 の。よ。遂ハ廣嗣を太宰府の都督小貶し。筑紫下。下。下。勅書と。冷
 くれ。廣嗣牙と。啗で。大い悲り。良家口ハ。苦く。忠言耳ハ。逆い。賢明乃
 君ハ。妖僧の毒舌ハ。惑はれ。又。浅す。さ。と。腸を。心。を。焦。せ。も。倫言

出て。多。何を。奈何とも。ま。か。筑紫下。り。多。熱腸益々冷。堪。て
 肥前國遠珂郡小城廓を構へ軍兵を召集。都へ攻上。去昉を。下。誅
 戮せん。と。企て。隣國の諸士大い驚。廣嗣ハ。所存の底を。正。
 謀叛の結構。と。心得。追。京都。注進。と。頻波の。帝。強。逆。鱗
 す。急。廣嗣を。誅。下。と。從四位上大野東人を。大將。從五位上紀の
 飯丸を。副將。軍監軍曹各四人を。副。近國の軍勢。徴集。都。合。二。万。七
 千余騎を。授け。加。衛門督佐伯常人。式部少輔阿部重。小。平。騎
 を。授け。先陣。を。の。斯。猪將都。進。天平十二年冬十月。上旬。肥前
 國板櫃。小。著。到。板櫃川を。前。あ。て。屯。張。節。度。使。の大旗。其。余。家。乃
 旌旗を。川。風。吹。靡。一。野。目。覺。廣嗣。斯。と。て。天。を。仰。以。て
 長。歎。一。嗚。天。か。る。の。太后。我。氏。族。を。朝。政。を。乱。さ。と。厭。ハ。先。妖。僧。玄。昉。と

殊と乱根を絶えんと謀り却て叛逆人の汚名を蒙り征將と差下るる遺恨
 かけられ玉砕けりも渾れを忘まじ竹焼ても節を失はざとぞり。今官軍の
 菟向ひ素意あら音を陳猶承引せんと花ぐ一戦と渾れ戦先せん
 軍兵二万余騎を引率一板櫃川へ出張一々官軍の先陣常入虫丸兩人
 川の東岸小屯して在る。虫丸敵軍の出陣せりて自身馬を乗出ぬ
 虫丸が其日の軍装小錦華の鎧小銀の星兜を猪首の香。鹿毛ある。駒
 小舟乗重藤の弓楯込で大音小叛逆人廣嗣小言ひを承れ義ありと出られ
 よと呼りつれ。小應と廣嗣馬を乗出。廣嗣が其軍装ハ維威乃
 甲小金の鍬形。五枚胃と著。三所藤の弓楯。黒の駒の太く逞。たお
 乘宛竟の郎黨を左右小従へ。徐りと馬を立答る。我身小と。叛逆の
 覚ふれ。示さる。義有とわれ馬を出せり。先今度下向あり。軍將ハ何人

小や姓名を承。んと向虫丸答て曰。大將軍。大野東人。副將軍。紀飯九斯
 の我ハ名告ふ。及む。佐伯常人。俱今度の先陣と。給りて下向せり。御迎
 今上。對し。何の宿意有て。謀殺を企て。天子。小。寧ん。欲。其
 意趣を述べ。述られ。と。廣嗣。馬。下り。再拜。曰。廣嗣。心中ハ
 高天。照。覽。あり。毛頭。君。對し。も。戦。を。動。を。存。念。あり。也。と。も
 太后。奴。僧。玄。昉。と。奸。婦。も。て。國。の。政。吏。と。し。朝。家。の。御。耻。辱。方。代。不。遺。さ
 ん。と。志。を。以。て。我。先。其。乱。根。を。去。助。を。除。ん。忠。表。を。な。し。御。用。ひ。あ
 却。て。幾。舌。を。信。じ。廣。嗣。を。遠。く。筑。紫。へ。賤。し。も。遺。恨。を。抑。太。后。ハ
 我。の。小。親。に。伯。母。公。子。藤。原。の。氏。族。に。在。る。天。魔。破。旬。小。魅。ら。れ。も。い
 人。行。迹。を。汚。と。天津。児。屋。根。命。の。裔。孫。と。藤。原。の。家。系。小。泥。土。を。ぬ。り
 多。吏。他。聞。の。鯨。り。千。載。の。瑕。瑾。何。吏。う。是。小。如。人。や。當。今。由。ま。御。名。の。汚。を

是も勝る脚吏有るがす。然るも代々忠臣なる藤原氏を一人の邪端破戒の僧に
 見替せしめて。豈聖明の君ともや。偏小佛徒の邪弁小惑はれども。乃脚
 辟使ふもや。依て我己吏を得て。軍勢を驅集め都へ押上り強拵と。この賊
 僧を下し。誅戮して朝家の政道を正しくせんとす。此外小敢て別
 旨趣なり。此一言偽りや。天神地祇の罰を蒙る。脚辺們願くハ此言を
 奏達し。去助を誅し。もう我小給るや。計らひ。然るも我小死を給るも甘
 心して。刃を受んと。高声小述べ。虫九も理りと。ハ。尚其偽言あり。吏
 を疑ひて。言々。ハ。所一應理あり。似れども。城廓を構へ。軍勢を驅集
 て。隣國を強と。致逆小。何とや。去助入を誅せんと。我度も。其旨と
 致奏する。如。察と。小脚辺。去助を。下と。成名と。実を。君小。響る。の
 所存なり。も。也。も。入を。甲。脱縛を受て。都へ上り。朝廷小。於て。其思。音

を奏せしむ。我徒已小勅命と。蒙りて。下向せし。上ハ。半と。空りて。帰洛せん。は
 脚辺を虜せむ。兵馬を動さむ。と。凱陣を。と。浩り。云々。小。廣嗣勅を
 と。と。大の。悲り。你が。如き。聾と。兎角の。向答。無益なり。支を。支て。ん。よ。蹴散
 て。上洛。賊法師を。誅せ。ハ。半。と言つ。馬小。肉。と。飛乗。急。小。軍。卒。小。下。知。を
 つ。一。齋。小。喊。を。と。と。發。せ。火。速。小。川。を。渡。さん。と。と。れ。を。常。人。虫。九。精。兵。の。射。人
 を。揃。へ。矢。を。射。る。吏。兩。の。く。廣。嗣。が。勢。此。矢。の。を。射。ま。れ。矢。場。小。七。十。人。射
 落。され。進。と。と。て。猶。豫。も。官。軍。の。副。將。紀。飯。九。八。千。余。騎。小。て。川。上。り。押。渡
 リ。煙。塵。を。蹴。ま。喊。を。發。て。廣。嗣。が。陣。撃。て。る。を。廣。嗣。是。を。見。て。全。弟。の
 綱。手。小。半。千。余。騎。と。授。けて。常。人。虫。九。勢。と。防。を。自。身。ハ。五。千。余。騎。と。將。て。飯。九。が
 勢。小。菟。向。以。俱。小。新。半。多。れ。を。勢。ハ。猛。く。喚。れ。叫。ん。て。攻。戦。入。吏。一。時。む。り。互。小。半。肩
 戦。死。賜。く。何。時。果。を。と。も。ん。え。さ。む。と。ろ。小。廣。嗣。が。將。胡。古。呂。が。手。小

屬する太宰史生板櫃小ケ呂凡河内田道の三人戦お及忠一平勢小下知
 及切られた。廣嗣が勢大平殊た須驚憂心の者あるごと平勢が前後
 の敵を支ひて強た之廣嗣大平怒激し。後の敵と追拂んとこれを前の
 敵軍襲ひつゝ前を防げば後より亦至殆んと防戦難義小一陣移り
 と乱れ立ち。是より前小廣嗣の舍弟綱平ハ敵軍と矢軍と在る小見
 廣嗣の戦ひ難義なりと中。是を救はんことを所小常人由九念つ川を渡り
 戦てうをる小見を救ふにむ。是非なく敵を向火花を散りて挑
 戦ひつゝ。戦るとつ小官軍の惣大将大野東人九千余騎の新手を採り川
 を颯とつゝ。大平喊を發て綱平が隊の横合より蒐まると小當の敵と
 支ひつゝ綱平が勢。新手の大軍小打まられ隊を七續八断小せられ平負もち
 死數をまると散り成て敗走るとれ綱平も今不是むでなり凡廣嗣と生死

なよめせん。手の者四五十騎を従へ一方と取平破て廣嗣が陣をきりて蒐往
 ろれを殘兵乃耻を知る者ハ敵と刺ちてあつた。乱軍の中陣没。言ひ
 され者ハ己がさか。没行又々官軍小降参とももまうり。去程小綱平ハ
 廣嗣が陣(池)行つゝ。小官軍雲霞段のどく八分と取圍と土煙天を曇せ
 鯨波山川小廻音れ廣嗣が勢ハ小困まれ休あれ。綱平争擬くと命れ
 平勢と屬す。嘆と喚て敵軍の中割て入無二無三小難まると京軍中
 其勇銳小群易し路を用てと通る。此時廣嗣ハ小百四五十騎小擊為
 きて十重千重小と困れ一丸旗とかり惡戦ともとも。舍弟綱平敵と
 切無けて弛来りる小と。廣嗣大平力と得兄弟一致小勇と奮ひは族る敵
 を共難まると遂小一條の血路を切用れ兄弟功をあら。本城をきりて蒐行んと
 する。馬も乗る馬ハ數刺の戦ひ小矢を多く負れ。四足を折て弱り伏

々々。廣嗣綱手。為方なく。歩まかり。々々。小田胡古。古。三十騎。斗
 の。残卒。引。徒。其身。も。矢。を。多。折。け。大。集。成。て。蒐。集。り。廣。嗣。兄。弟。不
 向。い。敵。軍。早。本。城。押。寄。此。所。も。大。勢。追。来。り。今。今。八。御。運。の。是。ま。て
 と。覺。い。名。も。な。れ。者。の。手。小。討。ま。り。何。所。か。り。も。落。延。の。い。潔。く。御
 自。害。か。り。其。是。小。て。追。来。る。敵。を。浪。止。い。奉。り。と。言。れ。廣。嗣。實。も
 と。同。意。綱。手。と。俱。小。松。浦。を。さ。て。と。落。行。ま。る。古。古。呂。今。今。心。易。と。三。十。人
 斗。の。廢。武。者。二。隊。追。来。る。敵。を。待。々。程。なく。官。軍。の。二。将。河。部。乃
 黒。九。三。百。騎。む。り。小。て。追。き。々。々。古。古。呂。待。殺。る。更。な。れ。此。も。猶
 豫。い。ど。三。十。騎。一。塊。小。成。て。敵。の。さ。り。合。死。か。と。尽。し。と。血。戦。敵。數。を。討。取
 終。小。緒。卒。と。り。小。亂。軍。の中。小。戦。死。々。々。黒。九。八。猶。も。手。勢。を。勵。ま。廣。嗣
 首。と。得。ん。と。松。浦。を。臨。み。追。行。々。諸。廣。嗣。兄。弟。松。浦。の。値。加。嶋。と。い

所。まで。到。り。木。深。た。杜。の中。今。座。と。め。鎧。の上。帶。解。と。脱。捨。刀。を。手。小。拔。持。み
 々。都。の方。を。望。み。眼。を。瞑。我。朝。家。の。柱。石。を。藤。氏。の。家。嫡。と。主。れ。殊。更
 王家。の。類。族。も。身。も。小。個。の。奴。僧。の。總。舌。の。と。も。小。屍。を。龍。門。原。上。乃。土。不
 肆。不。臣。の。名。を。唱。ら。々。遺。恨。お。も。え。よ。一。命。ハ。此。松。下。の。露。と。消。る。と。も
 一。念。の。靈。も。陽。土。小。留。り。玄。昉。が。五。鉢。を。劈。り。て。止。と。誓。り。終。小。兄。弟。相。向
 一。刺。ち。て。死。々。々。所。黒。九。緒。卒。と。り。小。馳。来。り。廣。嗣。は。胞。が。死
 亡。せ。り。を。見。て。其。首。を。討。取。本。陣。地。々。々。大。將。東。人。の。実。檢。小。備。々。東。人
 黒。九。が。高。名。を。賞。美。猶。余。黨。を。探。り。尋。て。擒。み。敵。の。城。廓。を。破。却。し
 て。三。軍。を。収。め。都。凱。陣。勝。軍。を。奏。聞。廣。嗣。兄。弟。の。首。を。得。る。上。目。の。也
 々。々。帝。睿。感。す。軍。功。を。賞。美。の。い。列。將。不。賞。祿。を。給。り。位。階。を。進
 め。廣。嗣。兄。弟。の。首。級。六。流。石。脚。縁。族。の。妻。あ。れ。を。梟。首。せ。せ。る。不。忍。ひ



かぞゝ其親族小給り寺院へ葬らせり。玄昉、廣嗣が誅せられとて
 大に治びます。太后の寵遇小降りて、尊大の行条増長し、小給り諸人
 吐して心悪く、口毎小誹謗して止ざり。帝も諸人の惡詭を用ひ、昏愚
 を惱し、太后小乞ひて玄昉を太宰府の觀音寺の別當小任り。哲之
 筑紫へ下向せり。其の是、不依て玄昉、已更を得ず。其の徒弟を從て
 來、騎小乗、行装美しく、筑紫へ下り。太宰府へ著て、觀音寺小入。翌日
 觀音堂へ結んと立出、多小俄然、天より曇り、一朵の黑雲、ま以降る。よと見
 え、多小雲中より廣嗣の亡靈在り。其の甲冑の姿、亦て現れ、憤怒の面、必
 しく勿當り、玄昉を執り、提て虚空へ飛騰り。其の徒弟、大に小、其の戰慄
 其皆宿坊へ逃歸り。其後、與福寺の唐院へ夜中、小、凄く鳴、響音て大地、
 と落る物あり。多小、衆徒、怪しく集りて、是を見れば、終小、をわぬ。玄

昉、生首小、血汐淋瀝とあり、り、多小、を衆徒、大に小、其は、是、廣嗣の怨靈の
 所為かり、下と古とあり、り、と、怕合、斯と朝廷へ、給り、其、り、以後、廣嗣の憤靈
 一般、崇とわ、或、堂中、小、大、鏡、形、回、り、其、光、り、凄、く、是、と、見、る、者、悉、く
 大熱病を患、多小、り、諸人、大に小、憂、怖、多小、る。帝も、此、由、南、食、て、深、く、恐、怖、し、む
 て、松浦の御小、社、を、建、て、廣嗣の怨靈と、神と、鎮、め、祭、り、其、憤、り、と、宥、め、の、ゆ、
 松浦の鏡の宮、り、小、是、が、り、と、や

傳、小、曰、僧、玄、昉、俗、姓、阿、刀、氏、也、初、め、義、淵、僧、正、の、徒、弟、と、わ、り、て、唯、識、論、を
 學、び、元、正、天、皇、の、靈、龜、年、中、小、入、唐、と、て、仏、法、を、學、び、多小、る。小、玄、宗、帝、玄、昉、を、尊
 び、て、三、品、小、準、と、て、紫、の、袈、紗、衣、を、賜、り、多小、る。玄、昉、在、唐、と、る、更、十、九、年、り、て、聖
 武、天、皇、の、御、宇、小、歸、朝、經、綸、五、十、余、卷、並、び、小、諸、の、佛、像、を、齎、歸、り、て、帝、獻、上
 一、多小、る。帝、玄、昉、を、御、信、仰、あり、て、僧、正、小、任、り、紫、衣、を、賜、り、林、中、の、内、道、場

小住しゆのいりや。玄助遂に後宮不出入して太后小媚縮ひ思寵を蒙りたり
 曾て玄助唐未存と死或異人玄助の人相をうけて你が面部小悪相あり又
 玄助の字音ハ還亡るの音あり。日本へ還るを必とて亡る。不知水く唐
 土小田まよと脱示くれ。玄助其言と甚ぶ心頭承けて愁ひたり。日本を
 慕へ情禁じ難く。遂に帰朝して禍を遭りと知り。然も思ふ。此脱當り
 玄助が横難を遭い相親するハ名の字音子因とて。其有る。依令唐小
 田ると。僧の身して高貴の君と奸婦一忠臣と絶。害せむ。何ぞ禍其身
 及む。るべし。身を慎む徳を脩め。日本へ還るも禍ひを遭はるべし。玄助が
 禍を遭しハ己と招くとて。自業自得とて。之をた而已

扶桑皇統記前篇卷之三畢

名古屋 大曾根 矢野平兵衛藏版之内狂俳書目

狂俳玉柏	七冊	浦浪集	二冊	五撰集	一冊
同太箸集	五冊	末廣集	二冊	壽志集	一冊
同續太箸集	一冊	苗代集	二冊	登賀惠里集	一冊
類題花の魁	七冊	六のち樽	二冊	嘉賀美具佐	一冊
花むしり	五冊	千代見	一冊	鐵夕海下	一冊
三日月集	四冊	田植うゑ	一冊	吳竹集	一冊
愛知土産	二冊	清蘭集	二冊	花供養	一冊
多年富勺部	五冊	八重垣集	一冊	樂美集	一冊
増のくゑ	四冊	名古屋扇	一冊	百人集	一冊

